

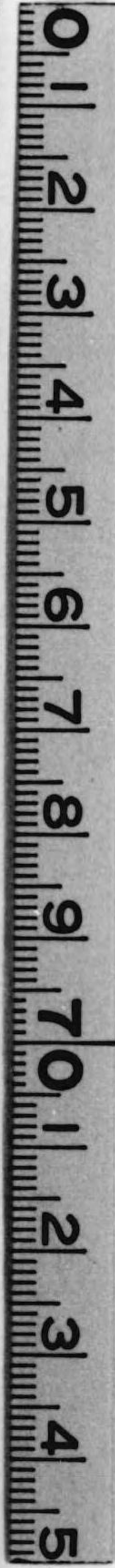
292.31-Ta33ウ



1200500733489

292.31

TA33



始





292.31-Ta33ウ



292.31

TA33



思に旅の印俣

著 江 廣 橋 高

納本



292.31  
TA33



佛印の旅に思ふ

著 江 廣 橋 高

大和書局刊





946  
263

隨筆  
佛印の旅に思ふ

佛印の旅に思ふ





目次



---

明治節の日に	163
サムソン紀行	171
佛印の印象	195
街頭所感	207
佛印の文化について	215
十一月二十六日の日記	229
廣東の夜	245
佛印における教育について	265

---



---

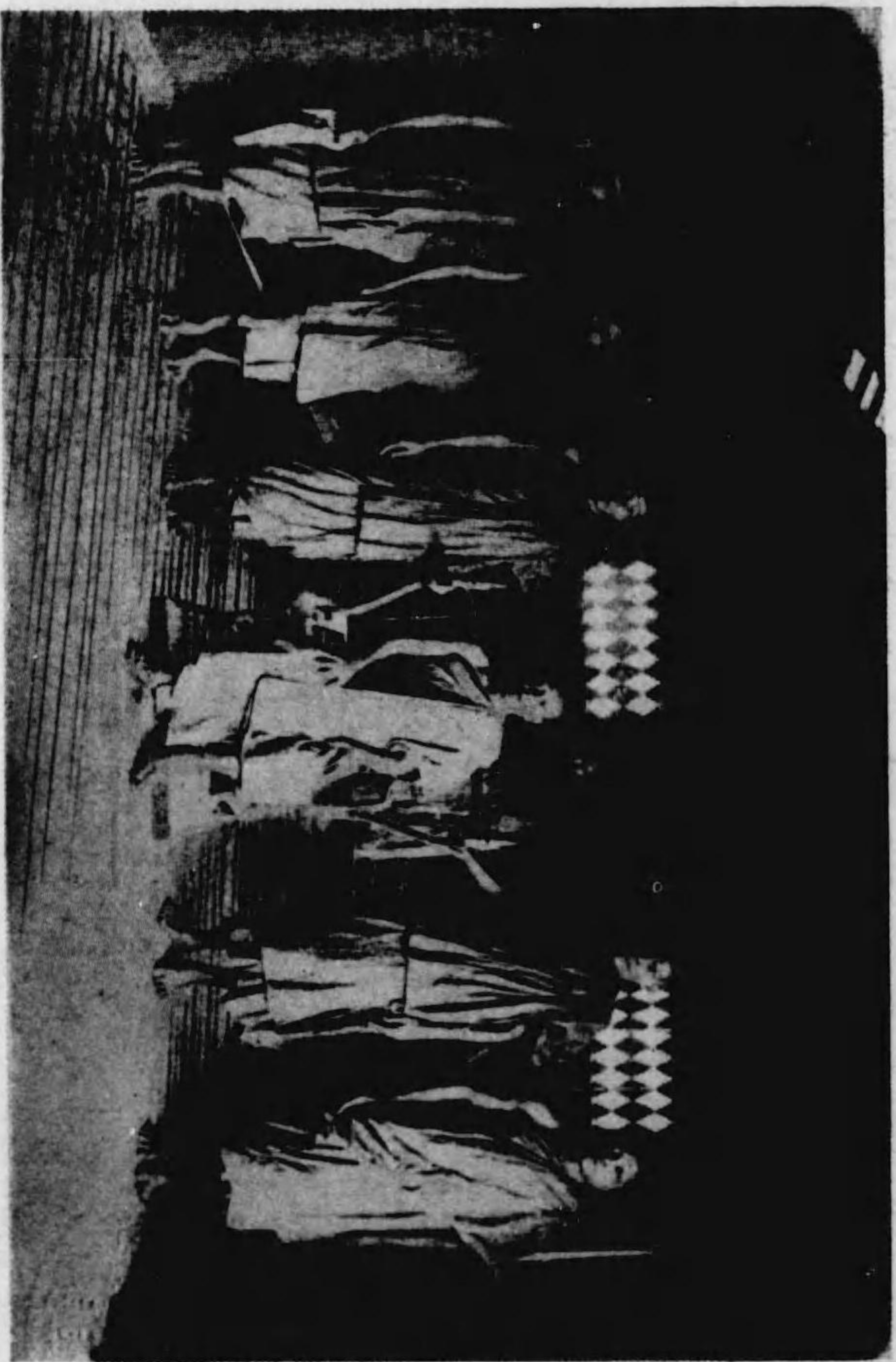
はしがき	7
高雄にて	23
船中にて	45
ハノイまで	63
佛印覚え書	85
タイゲン紀行	105
ハノイの日	119
ドオソンの旅	143

---



〔寫眞目次〕

- 1 寺小屋學校の先生
- 2 安南の藝人
- 3 タイゲン鑛山の露天掘
- 4 安南の漁夫
- 5 路傍の飯屋
- 6 交趾支那の初等學校（始業前の衛生検査）
- 7 カムボヂヤの寺小屋學校
- 8 ハノイ、プチ・ラック（小湖）風景



（サチボムカ）先生の校學屋小寺



はしがき

佛印は私にとつて一つの不思議な世界であつた。私は幼児のやうな瞳を輝かせて、その風物や、そこに住む日本人や、原住民の生活を見た。そしてそれは私にとつて、愉しい生活であつた。私はいま彼地で同胞の人々から受けた友情を偲びながら、筆を執つてゐる。それ等の人々の大部分はまだ佛印に止まつてゐるのであるが、中にはマレーやタイやビルマに行つた人もあり、日本に歸つて來た人も無いわけではない。それ等の人々と又會ふ日があるか、また再び會つたにしても、嘗つての日と同じやうな愉しい時をともに過し得られるかどうか、私には解らない。佛印といふ特殊の條件が私たちの交友をたのしい、そし



て張りのあるものとしてゐたからである。それが私が佛印を以つて一つの不思議な世界であつたといふ理由である。そのやうな愉快かつた原因はいろいろあらうけれども、私の佛印にゐたときが對米英開戦の直前であつて、嵐の前の佛印であり、人々はすでに大和民族南進の最前線たる佛印が來るべき聖戦の日にはその兵站基地であるべきことを豫感してゐたことが、その主要な一つであつたであらうと思ふ。私は人間が重大なことに直面した時にその肉體で感じる豫感が、知性などと呼ばれる「淺簿」なものよりも遙かに聰明な場合があるのを信じる者である。肉體に感じる豫感であつただけに、果して對米英の全面的な戦争が近く始まるかどうかを、確信して斷定した人はなかつた。非常に身近かな問題であつたにもかかはらず、私たちは開戦のことを餘り話題にしなかつたし、さらに開戦の場合にはどうするかなどに就ては一度も話し合つたことはなかつた。しかし肉體の豫感そのものが、佛印に住む同胞の人々の精神を清純に

し、人々の行動を美しくしてゐたのではないかと思ふ。とにかく私は日本人の性情の美しさを、今度の佛印旅行のときほどしみじみと感じたことはなかつた。このことを私はまだ一度も祖國の土を離れて海のむかうから祖國を眺めたことのない人々に、何度も繰返して言ひたいのである。本來日本人はチャーチルのやうに圖太くあくどいものにはなり得ないのであるが、しかし内地の日常生活においては、多少の惡徳が絶無ではないし、その精神の態様については、もつともつと反省さるべき點がたくさんあると思ふ。しかし日本人の性格がその本質として清純なものであることを、私は數年前にヨーロッパに行つたときに感じたし、今度の佛印旅行では、その本質が、生活のための小さい奸計に煩はされることなく、自然に流露してゐるのを見たのである。このやうなことを言つても、信じ得ない人があるかも知れない。それは純粹な性格の人は自らの日常生活に對する嚴しい批判的な感覺を持つてゐて、そのために逆に他人の、



ことに遠い他人の偽装的な態度を、そのままに、尊敬の氣持で受取る傾向があるからである。日本の自然そのものが持つ清純を極めた嚴しさは、この國土に住む人々の性情を表してゐて、まことに象徴的である。私が佛印で會つた同胞の人々に、若し忠告することがあるとしたら、日本的な善良さから複雑な傳統と性格とを持つた雜多な原住民に感性的な、涙もろい愛情を以つて臨むことの危険についてである。もちろん原住民を米英などの搾取から解放してやることは、大和民族の尊い大きい使命であるけれども、その愛情は大いなる意志によつて貫かれたものであり、現實の嚴しい批判によつて導かれるものでなければならぬのである。

佛印といふところは、大東亞の共榮圏内において特殊の立場にあつて、將來いろいろの問題が解決されなければならぬだらうと思はれる。高い文化を誇稱してゐるところのフランス民族の領土權なり支配權なりが確立してゐて、そし

て約四萬のフランス人が定住して居り、その支配權の下に東洋人たる二千三百萬人の原住民が大體貧窮の生活に喘いでゐるのである。そして私の滞在中の主な關心事は、それを要約して見れば、われわれ日本人が佛印といふ土地において活動してゐるときに、精神や性情のどういふ屈折を示すかといふことと、日本人と佛印原住民との接觸面に起る問題とであつたと言ふことが出来る。さうしてこの「佛印の旅に思ふ」は生れたのである。私が見た日本人の態度や行動には、われわれが誇つてもよい點もあれば、反省を要する點もあつて、それを語ることは、今後のわが國の文化の上にも參考となるに値するものがあると、私は信じてゐる。

豫定の滞在期間が終つたとき、私はハノイからサイゴンに行き、途中ユエ（順化）で一泊して、それからサイゴンからブノムペンを経て有名な佛蹟アン



コール・ワットを訪れ、そしてサイゴンへ引返して、十二月九日出帆の筈の汽船に乗つて歸國しようとして計畫した。それで去年の十一月二十九日午後六時、私が少し關係してゐたある國策會社の社員の人々の見送りを受けて、私はハノイの停車場を立つたのである。ところが翌朝になつて、私たちの列車がドンハ（東河）といふ驛で、洪水のために立往生してしまつた。サイゴンまでの四百三十里の中の百五十里ばかりを行つたわけで、ユエにはもう近かつた。私たちの車室は私の外には三人の兵隊さん（下士）であつて、何れも支那事變における歴戦の勇士の人々であつた。日本の五月空のやうに灰色に曇つた空は、晴れさうで晴れず、絶えず細雨が降り、線路の傍の水溜を次第に大きくして行くのであつた。無聊に苦しんだ私たちは食堂車から麥酒を取寄せて、みんなで飲みながら、私は兵隊さんたちの素朴な無邪氣な話に愉しくほほえましく聞き入つてゐた。

私たちの列車の一・二等には、ほんの四・五人のフランス人が乗つてゐたきりで、あとは皆日本人であつた。通信社關係の人が四・五人、經濟調査團の人が三人、それに五十人ばかりの兵隊さんであつた。私の豫定が恐らくは實行不可能であらうことを心配してくれたのは、同盟通信社の二人の社員の人で、その中の一人の知久君が皇軍の昭南島占領の前々日かに、プキテマ高地へ五十米の地點で、敵の砲彈の破片のために右腕を負傷したといふことを、私は昭南島占領當時の新聞の記事で知つた。

午後四時頃になつて、列車は少數の車輛を残してハノイへ引返すべき命令を受けた旨、専務車掌が傳へて來た。私のフランス語が役に立つて、私は乗客と驛側との仲繼者となり、日本人側の代辯者になつてゐた。そこで日本人は全部一致の行動をとることとし、何れも南下を急ぐ人々であつたから、私がいろいろと驛當局と交渉したけれども、洪水はますます増水して何時になつたら通過



出来るか見込がつかないといふことであつたし、たとへこのドンハで待機したところで、結局ハノイから機關車が来て連れて行かなければサイゴンへは行かないのであるとのことであつたから、私たち一同は止むなくハノイへ引返すことになつた。さうしてハノイへ着いたのは、翌十二月一日の正午頃であつた。

私は飛行機で日本へ歸らうと思つて會社へ電話をかけて見たが、當分は座席が得られる見込みがない様子であつた。ハイフォン出帆の船は十二月中には一隻もなかつた。そこで一度行つたことはあるけれども、殆んど私の個人的な關係のないサイゴンで開戦のために立往生するよりも、多少の關係もあり知人も多いハノイで籠城するのが適當であると考へて、私はサイゴン行きの乗車券や寢臺券の拂戻しを受けて、カルノ街の宿舍へ歸つた。私が引返して來たこととハノイ籠城の決心をしたことを知つた友人が、それでは祝杯を擧げませう

と言つて車で迎へに来てくれたので、私たちはプチ・ラック（小湖）の湖畔にあるキャフェへ、祝杯もをかしいけれども、ともかくウイスキーを飲みに行つた。そして午後九時頃その友人と一しよに私の宿舍へ歸つて來たところへ、航空會社から電話で、明朝座席が一つだけ都合がつくことになつたから、突然ではあるが朝七時までに飛行場まで來てくれと言つて來た。私たちは信じられない氣持であつた。

私は十二月二日の飛行機でハノイ郊外ジャラム飛行場を出發して、途中廣東に一泊し、翌三日臺北を経由して、月の出てゐる福岡雁の集飛行場に着いたのである。私は祖國の土を踏んだ。九月に神戸を出帆してから約三箇月の旅行であつた。その翌日は、波のやや騒ぐ多々良濱邊に元寇の役を偲びながら、私は宮崎神社に參詣して、悲壯な決意を以つて立たうとしてゐる祖國の國土安穩を



祈つた。それは殆んど愉しい、清々しい氣持であつた。それから歸京の途中、故郷に立寄つて墓參などを濟ませ、十二月八日の朝、わが國が米英と交戦状態に入つたといふラジオを聽いて、私は汽車に乗つた。途中沼津あたりで日が暮れた。驛の混雜か何かのためであつただらうが、私たちの列車は丹那トンネルの中で七・八分停車した。そしてトンネルを出て見ると、平素はいはゆる不夜城の熱海の市街一帯がまつ暗で、列車のホームに豆ランプのやうな光が僅かにともつてゐるだけで、足もとが分らず、乗降者は手探りの有様であつた。戦争が始まつたのであつた。私は故郷の町まで迎へに來た家内と子供との三人連れであつたが、少しもあはても驚きもしなかつた。當然東京が爆撃されるものと覺悟してゐたのである。

私は親しかつた多くの友人を嵐の前の佛印に残して、一人歸つて來た。サイ

ゴンからブノムペンへ、それからタイ領へ、そしてさらに進軍すべき兵隊の人々とも別れて來た。私の車中やハノイの驛における通譯の勞を喜んでくれた二人の將校の人と同室の誼よしみの三人の下士の人が、ハノイへ戻つて來た日の午後、私を訪れてくれた。その將校の一人は軍醫中尉で、千葉の醫科大學の講師をしてゐて應召した人であつた。私は旅を終へて東京へ歸つて來たのであるが、その當座人々の氣持が寒く、歸つて來た東京の方が却つて外國のやうな氣がする、私はよく戯れて人に言つたものである。そして佛印で私が親しんだ若い人たちが、どんなに正しい意味での文化を求めてゐたかも、今は私の思出となつた。

よくこの頃共榮圏における文化の樹立とか工作とかいふことが言はれてゐる。もちろんそれも必要ではあらうけれども、私は國內における文化の建設乃



至はそれへの熱意の方が、わが民族が大いなる経験をしてゐる今日の重要な課題であり、先決問題であると思ふ。そしてわが國に世界に誇るべき文化があるときに、共榮圈の諸民族をして日本を敬愛させ、信頼させることが出来るのである。

私どもは今度の戦争において、これほどにも皇軍が輝かしい戦果を収めやうとは、逆に言へば米英の軍隊がこれほどにもだらしがなからうとは、豫想しなかつた。私は米英との戦争が起れば、當然東京は頻繁に烈しく爆撃されるであらうし、佛印と日本内地との交通などは、少くとも三箇月や四箇月の間は、極度に脅かされるものと思つてゐた。それが米英の戦術でなければならなかつた。だから私は「ハノイ籠城の決心」といふ言葉を使つたのである。かやうに私たちは一朝事ある時の大和民族の偉大な爆發力の認識を缺いてゐた。少くとも充分ではなかつた。このやうな認識と知性とを以つて、今まで文化や藝術を

語り、社會を論じて來たことは、慥かにわれわれの不明であつた。そこでこの點における覺醒が新しい文化の要因となるであらう。偉大な經驗は常に偉大な文化の母である。しかしおそらくは今までの文化の缺陷への反省のためであらうと思はれるのであるが、何か今日「文化」といふことを眞面目に考へることが時局柄不謹慎であるかのやうな、國を愛する所以ではないかのやうな、ジャーナリズムに筆を執つてゐる人たちがマレイや蘭印やビルマで誠忠無比に戦つた軍人が自分たちの子弟であり友人であり或は隣人であると考へることが何か冒瀆でもあるかのやうな、東京の文化人に自卑的な感情を興へてゐる。

ヨーロッパの歴史を見ると、封建的な中世の末期に文藝復興が人間の人間としての價値を教へたことによつて、やがて人間を中世の政治的宗教的壓迫から解放する運動を起させ、これは自由主義文化を發展させたが、近代になつて自由主義文化が求めた人間の價値觀が多分に自然主義的なものであつたことの發



見から、人間の生活の高次な意義を把握することによつて新しい文化を創造しようとする努力が起り、それがいま遠からずヨーロッパの文化を制壓しようとしてゐる。かやうに文化の革新はそれまでは意識されなかつた新しい要素を認識して附加することによつて、常に實現されるものである。そして一つの要素の附加が時に全體の相貌を甚だしく改變させるものであることも、人類の過去の記録が教へてゐる事實である。

わが國の文化人が今までの自らの缺陷に對してきびしい反省を、それはむしろ罪に坐するていのきびしい反省を持つことは、當然求められなければならないけれども、しかしそれは今まで追及して來た文化の理念を一ぺんに泥溝に捨て去ることではなくて、今まで追及して來た理念のさらに一段の發展として、この大和民族の大いなる使命が把握されるのでなくてはならないと思ふ。かやうな強靱な思考力の缺乏が、從來しばしばわが國の文化を混迷させたのである。

る。

この大和民族の素質的高貴さの本質こそは、今まで地上に文化を築いてゐた西洋人の識らなかつたことであり、それを把握し、それを文化の上に實現し、そして日常の生活においてこの美しい心情の流露を妨げてゐるものを訂正し除去することによつてのみ、私どもは今までの西洋文化を超克して、独自の文化を建設することが出來、そして今まで西洋文明に服従して來た東亞共榮圈の諸民族に大和民族の文化を欽仰させることが出來るのである。

私は今日の文化人が日々の輝かしい戦勝報告の國民的感激の蔭にかくれて、自らの責任を回避し或は厄介視してゐるやうな印象を持つのであるが、しかし高貴な文化を建設することは、今日において最も必要であり、そして教養された立派な大和民族が、特に逞しい青年たちが、大共榮圈内に發展して、指導的な役割を果すのでなくてはならないと思ふ。



以上は「佛印の旅に思ふ」には関係がないやうであるけれども、それが佛印から歸つた私の感懐であつて、敢てここに記す次第である。

なほ私は佛印における現行教育制度の成立に關する調査を本書の中に挿入した。原住民教育の問題が起つた場合における技術的の困難を豫想して、何等かの参考となるべきことを信じたからである。

この書を世に送るに當つて、私は多くの人のお世話になつたことを思ふのであるが、特に岩畔豪雄氏、松本信廣教授、越藤恒吉氏、近江谷駒氏、小池達吉氏の芳名を記して、心からの感謝の意を表する次第である。

## 高雄にて

九月十七日、午後十時二十分發の列車で、私たちは臺北を出發して高雄に向つた。最初は臺北から飛行機でハノイへ行く豫定であつて、九月十四日と十五日と二度早朝に飛行場まで行つたけれども、その二日とも天候が悪くて缺航になり、私は二度とも機上でたべる筈の朝食用の軽い辨當を貰つて、宿へ歸つて來た。お辨當は二日とも少量のサンドウィッチと二三個のキャンデーに一個の梨であつた。そして新聞を見ると、南洋やフィリッピン方面に幾つかの低氣壓が發生してゐることが報じられてゐて、暫くは飛行機が飛ばないやうに想像されたので、私たちは飛行機をやめて、高雄から便船を求めて海路によつて佛印



へ渡らうとしたのである。

臺灣の九月の中旬はまだ流石に暑く、私は風を求めて明け放つた窓から暗い窓外を長い間見まもつてゐた。乗客はみな翌日の活動のために、發車するとすぐに寢臺へ行つて、誰も寝る覺悟をしてゐるらしく、談話室には私の外には人がゐなくなつてゐた。私は水のやうに静まつて行く氣持で、十二日に基隆から臺北に着いて以來、臺北で會つたいろいろの人や事件のことを考へたり、またこれから行かうとする佛印の生活を遙かに想像したりしてゐた。——臺北では、正午頃の暑い日盛りの街を、放浪の詩人ラムボオのアフリカ落ちることなど、くだらない怠惰な空想を弄びながら歩いてゐたら、突然に總督府のお役人の制服を着た吉田君に呼びかけられた。すぐにはそれが誰であるか解らなかつたほど、私の氣持は暑さのために遲鈍になつてゐた。

吉田君は私と大學豫科の文科一年の時に同じクラスであつたが、それから志

を立て、入學試験を受け直して醫科に轉じ、私はそのまま文科に残つたのである。それ以來會はないのであるから、茫々二十年の月日がたつてゐるわけであつた。とりあえずその近くの喫茶店に入つて、冷たいものを飲みながら話をした。卒業すると間もなく開業してゐた嚴父がなくなつたので、吉田君は郷里へ歸つてその醫院を受けついだのである。しかし開業醫のやうな商賣のきらひな吉田君が機會を求めてゐる中に、北滿開拓義勇少年團附の醫師の募集があつたので、吉田君はそれに應じ、二箇年半ばかりを北滿で暮し、そしてまだ最近に偶然の機會から臺灣總督府に就職するやうになつたのであるといふことであつた。吉田君は日やけのした淺黒い顔をしてゐて、しばしば開業醫に見られるやうなとり澄した冷たい丁寧さなどはなく、授業中教室の窓から飛出して逃げた頃の吉田君そのままの顔を老ひさせてゐた。——

互に仇敵のやうに睨み合つてゐて、挨拶がしなくなる弱氣を示した方が賤民



であるときまるかのやうな一等の寢臺車の車室は、私ともう一人の人との二人部屋であつた。あまり夜の風にあたつたためか、急に痛み出した咽喉を心配しながら私は不機嫌な氣持で横になつた。型の通り出發に際してベストとコレラと腸チブスとの豫防注射と種痘とを受け、病院に勤めてゐる友人からマラリヤ用のキニーネとそしてクレオソート丸とを多量に持たせられた私は、そのことのために、病氣に對して神経質になつてゐた。それに夏服を着てなほ暑さに苦しんでゐながら咽喉が痛いといふことが、私の經驗にはかつて無いことであつたので、唾液をのみ込むときに針で刺されるやうに痛むのが、無氣味であつた。

夜が白々と明けたときに私が埃に塗れた氣持で不眠の眼をさますと、もう同室の客はゐなくなつてゐて、空しく毛布が亂れてゐた。窓外を見ると、稻の刈入れをしてゐる人々や刈り取つたあとを牛を使つて鋤き起してゐる人々など

が、すでに忙しげに勤勉に働いてゐた。廣い平原であるらしく、遠くにも山は見えず、人家の部落も稀であつた。甘蔗の畠が眞菰のやうに茂つてゐた。

高雄の驛は市街から相當に離れたところにあつた。出迎へてくれた人の話では、十年後の市の發展を豫想して新築されたものであるといふことであつた。南方發展の基地として、人口百萬の増加が豫想されてゐるとのことに、すでに臺灣まで來ると、それだけ人の考へ方がずれて大きくなるらしいのを、私は珍しいことに思つた。バスに乗つて市内に入り、定められた旅館に着いた。そして荷物を部屋に入れる間もなく、私は耳鼻科の醫師をたづねて行つた。街には亞熱帶地方の朝の埃つぽい白々した光がただよつてゐた。跣足で歩いてゐる本島人の街々など、黄熱病でも潜んでゐる瘴癘の地であるかのやうに思ふ自身身に苦笑しながら、教へられた街を行つて、私は醫院のドアを排した。若いお醫者さんで、まだ最近まで臺北醫大にゐた人であるといふことであつた。その



研究室の同僚の人々が饒別に贈つたといふ大きい時計が、閑寂な控室に掛けられてゐて、物憂さうに動いてゐた。私は咽喉に薬を塗つて貰ひ、そして含嗽薬を貰つた。その時私は若いハイカラなお醫者はたいいの人が洋畫を好むものであることに思附いて、私の中學時代の友人で高雄に住んでゐる筈の山田君のことを尋ねてみた。山田君は東京の美術學校を卒業してしばらく内地の女學校の畫の先生をしてゐたが、何を思つたか、この遠い臺灣の南端に近い高雄に渡つて住みついてしまつたのである。先年フランスへ行く時には、行く時も歸つた時も、東京の郊外の私の家へ訪ねて来てくれた。しかしそのまゝ雙方とも音信をしないままでゐる。それに今度の旅行では私は高雄へ寄ることを豫想してゐなかつたので、山田君の住所を心得ておかなかつたのである。若い美男のお醫者は、「さあちよつと待つて下さい。聞いたことがあるやうですね」と言つて額に付けてゐた反射鏡を外し、自分から立つて行つて、診察室と藥局との中間

の廊下にある電話をかけて、やがて「ああ、さうですか」と驚いたやうな言葉を響かせ、電話を切つて歸つて來た。その報告に依ると、山田君はもう畫家ではなく、今は二千人もの本島人兒童ばかりを教育する公學校の校長さんであるとのことであつた。

山田君は白い日覆ひをつけた學生の冠るやうな帽子を冠つて、白の詰襟の服を着て、自轉車を引張つて、宿へ訪ねて來てくれた。昔から色の黒い方であつたが、その一層日灼けのした顔に、私たちが「地藏さま」と綽名をつけてゐた通り、佛さまのやうに額のまん中に黒子があるのが、昔の通りであつた。山田君はいろいろと教育上の抱負を語つて、たいそう元氣であつた。本島人ばかりの街に住んだ經驗やら、本島人は愛情に飢えてゐるのだから親身になつて面倒を見てやらなければならぬことや、しかし決して甘やかしてはならないといふ見解やらを、謙虚に、しかしそれでも眸を輝かせて、ぼつぼつ述べた。そし



て今は自分の學校出身の本島青年に、「大政翼賛劇」の稽古を、夏休み中一日も  
缺かさず自分から出て行つて世話し、土地の有志の人に指導して貰つてゐるこ  
とを話した。彼等臺灣本島の青年たちは、山田君の意見では、今までどんな形  
式にしても自己を表現する機會を得てゐなかつたので、この芝居の稽古を豫想  
以上に喜んで、非常に熱心にやる。そしてこの二十六日には高雄の劇場を借り  
て、諸方面の人を招待し、一般にも公開する運びであるとのことであつた。山  
田君はまたその學校を出た青年が今度の支那事變以來、軍夫として徵傭される  
ことが多く、そして非常に成績がよく、こんな立派な臺灣青年を育てた學校が  
見たいと言つて時々人が視察に来るやうになつたと話した。この地方の本島人  
の言語は南支那系統であるので、南支や海南島へ軍の通譯として行くものが多  
く、そしてその地方の人民の指導者としての地位が本島青年に開けたことが、  
彼等に新しい希望の天地を作り、そしてそのことは即ち教育にも張合ひが出來

て來たことであると、山田君は語つた。

私は宿で山田君と話しながら、晝食を共にした。少し曇つてゐた空がすつか  
り晴れたらしく、庭に強烈な光が照つてゐる。煽風器を烈しく廻轉させなが  
ら、私たちは汗を流して、麥酒を飲み、食事をした。山田君はいつの間にか教  
育者專業に轉向したその理由を語らなかつたけれども、この轉向は矢張り山田  
君の性格にふさはしかつたことのやうに、私にはだんだん考へられて來るので  
あつた。山田君はさうして教育する臺灣本島人の兒童や青年がかわゆくてたま  
らないらしく、それは食事を終つてから散歩かたがた山田君の宅へ私が同行し  
た途中で會つた子供たちが、山田君に對していたづらしい微笑を含んでする  
敬禮と、それに対する山田君の答禮との様子によつて、私の心に響いて來るの  
であつた。山田君はフランスへ繪畫の研究に行くやうに東京の友人には言ひ觸  
らして西洋へ出發したのであつたが、實は繪畫よりは教育の視察が目的であつ



たのであつて、フランスよりも獨逸に多く滞在して學校を見て來たのであると白狀して微笑した。

道路に面した裏庭に一本のバイヤの樹が實をつけて立つてゐる山田君の家に行き、私はその奥さんに一別以來の、一別と言つても二十年別以來の、挨拶をした。むかし山田君が結婚した當時に會つたことのある人である。その頃私の郷里の市では、結婚した婦人が洋装してゐることは、珍しい例であつた。それに山田君が温順な男であつたのに反して、奥さんはむしろ勝氣で、私が山田君の繪を批評すると、傍にゐて山田君をかばふやうな口吻を洩すのであつた。當時私ども文科の學生の間では常識に反逆する氣風が強く、痛烈な皮肉を言ふことが流行つてゐたので、私もこの華奢な山羊のやうに生き／＼してゐた小娘に、ずゐぶん厭がらせを言つたものである。

しかし奥さんは今は三人の子供の母であり、その長女は去年女學校を卒業し

て、現在は東京の洋裁の學校へ行つてゐることであつた。小娘のころの容貌は殆んど失はれて、その丸い系統の顔が意外なほど淺黒くなり、話をする時にびくびく動く小鼻のあたりが醜くかつた。全く實用的な簡單服を着て、いかにもよき世帯女房らしく、ときばきと、私たちに冷たい飲み物や果物を運び、留守中に起つた要件を主人に話し、電話がかかつて來ると素早く立つて行つて電話用語で處理し、いたづらをする子供をなだめなどするのであつた。今は臺灣でも女中難であるとのことであつた。表の庭には檳榔樹が茂つてゐて、その簇葉を洩れた光が地面に躍つてゐた。私は平和な、そしてどこか索漠とした中に、本島人に親しまれ本島人の教育に熱心して、そして安住の地を見出してゐる山田君の幸福な日常を想像してゐた。

私は奥さんに暇を告げて、午後にもちよつと學校に行かねばならないと私に斷つて自轉車を引張つて出る山田君と一緒に、山田君の家を出た。そして街道



で再會を約して、右と左に別れ、私は暑い午後光の中を宿へ歸つて行つた。浮草に覆はれた、水の殆んど涸れた溝で、熱心に蛙を釣つてゐる人々があつた。私は山田君の如くあることが正しいと考へながらも、しかし山田君の生活にはすぐには共鳴出来ないものを感じてゐた。それは私が東京に住んでゐてまだ足を洗つてしまふことが出来ない私の空想的な生活と山田君の實際的な生活との溝であるかも知れなかつた。しかし私は山田君が私などが月々に頭を悩ませねばならない生活といふものを立派に解決してしまつてゐるのが、羨しくもあり、山田君を祝福したくもあつた。金持のバトロンを廻り歩かねばならない畫家であつてくれるよりも、どれほど立派であるかも知れないと思つた。そしてなほそれ以上に山田君を祝福したかつたことは、山田君がとにかく張り切つてゐて、儀禮的にも實際的にも自卑的な或は愚痴的な態度を少しも示さないことであつた。東京の文化といふものを考へても、少しも引け目を感じない山田

君であつたことである。もちろんさういふ精神の振幅が比較的狭いことが、山田君を畫家として大成させず、よき教育家にして所以であらうけれども、それは山田君にとつて悪いことであらう筈はなく、久し振りに會ふ私にとつては明るくて快いことであつた。

佛印行きの船を待つてゐる私の高雄滞在は一週間にわたつた。昔の大井川などの川止めのやうであつた。その中の或日に、私はA會社の高雄出張所に勤めてゐる若い會社員の本田君の來訪を受けた。本田君は東京の某私立大學を出てから一年ばかり經濟調査班といつたやうな仕事で北支に勤務し、今年の四月にA會社に入り、七月にここの出張所へ來たのであるとのことであつた。本田君は雑誌か書物かで私の名を知つて居り、そして私はA會社の關係で佛印へ行かうとしてゐるものであつた。本田君は北支にゐた時は、ほんたうにお國のためといふ考へを亂されずに仕事をするのが出來たが、この高雄へ來て會社の會



計係に廻されて、他人の旅費の計算ばかりさせられ、しかも同僚が殆んどみな生活に疲れた人々で、名目をつけて無用な旅行をして旅費を稼ぐことばかり考へてゐるのを見ると、たいてい腐らせられますよ、といふやうなことを言つて、しきりに愉快であつたらしい北支時代の生活の挿話を語り、ここでは會社が退けたとき、獨身者の暑い合宿部屋へ歸つても何する氣にもなれず、結局飲みに行くより仕やうがないといふことになりますよ、などと笑つた。この本田君は學生時代にその當時流行つた學生劇に凝つて學業を怠り、親から勘當されたやうになつて、田舎廻りの芝居の座方みたいなことを一年餘りもしたことがあり、結局大學を六年かかつて卒業したといふのであつた。そんな話をしてゐると、數年前に私が識つてゐた學生劇の連中とは本田君もたいてい交友があつたことが解つて、それが一層私たちの會話を親しくしたのであつた。それから私たちが二三度會つて、食事などの席で少し酒がまはつた時に、私はこの本田

君を「東京の場末の詩人」などとからかつた。私はこの本田君こそは現代の青年の一部に存在する最も純粹なタイプの典型であると思つたりした。まことに非生活的であり、ロマンチックであり、理想主義的で情緒的である。彼等青年の捨身の善良さは、私のやうに生活への關心から離脱出来ないものを、時にたぢたぢさせるほどの輝かしい面を呈することがある。(私は多數のさういふ青年に嵐の前の佛印で會つた。)

本田君は背が低い方で、會社員らしくなく昔の象徴派時代の詩人のやうに頭髮を長くしてゐて、美しく澄んだ笑をする。私はこの本田君を、臺灣の本島人の青年の幸福を考へて骨身を惜しまず翼賛劇を稽古させてゐる山田君に紹介することを、愉しくそして誇らしいことに考へた。

高雄の市街はあまり散歩するところもない殺風景な、埃つばい印象を與へるところであつた。街の西側に樹の茂つた小山があつて、そこは眺望もよく、樹



間に猿が遊んでゐたりするといふことであつたが、今は要塞地帯であるために、頂上までの登攀は禁じられてゐることであつた。それに何しろ日中は暑いので、私は多く宿の玄關のところにあつた本箱から小説本を持出して来て、部屋で寝轉がつて讀んだ。鷗外全集を讀んだが、昔感心した作品も、今は鷗外の酷薄な精神ばかりが目について、私はむしろ不愉快であつた。それにベダンチックだといふ世人の批評を先廻りして、しきりに厭味を言つてゐながら、不必要なところにこけ脅しの外國語を片假名で入れてゐるなども、それが當時のダンディだつたのかも知れないが、馬鹿々々しい氣がするのであつた。殉死者の心理を取扱つた「阿部一族」などは鷗外としては傑作なのであらうけれども、私には愉快な作品ではなかつた。やはり明治時代の方が今の時代よりも多分に封建的性格を持つてゐたんだと、私は何か腹立たしいやうな氣持になつて、大型版小さい活字二段組の本をはふり出すのであつた。

陽が落ちて宿の廣い玄關先に打水が撒かれる頃になると、それでも幾分かは凌ぎよくなるのであつた。庭先の椰子の樹に僅かな風が揺れてゐる。私は卓上電話を廻して、山田君とそして本田君とを誘つた。

打水のされた街路を挟んで、高樓が聳えてゐる。三々五々、人が入つて行つたり出て來たりする。そこは高雄市の遊廓の一劃であつた。私たちは山田君の案内でうまい天ぷらを喰はせるといふ家の三階へ導かれた。支那事變以來、高雄は何かと人の往復が多くなり、それに海南島方面行の汽船の發着點にもなつてゐるので、このやうな料理店で席を得ることが容易ではないといふことであつた。私たちが八時までには席を明けるといふ條件つきであつた。狭い路次を隔てた隣りの家のやはり三階はキャフェの女給さんたちの溜りの部屋であるらしく、七八人の若い娘が騒々しく振舞つてゐて、さういふ女一流の眼つきでこちらを偷み見たり、髪形をなほしたり、朋輩と話し合つたりしてゐた。亞熱帶



地方の日暮時の一刻であつた。

山田君は一部の保護者が集めてあるから、そこで少し話をしなければならぬが、遅くとも九時には終るから、どうか青年たちの稽古を見てやつてくれ、用事が終り次第自分もそちらへ行くから、と言ひおいて、自轉車で先に歸つて行つた。私と本田君とは話し乍ら歩いて行くことにした。明るい星月夜であつた。山田君の學校のあたりは新開地であつたので、私たちは野原の中に仄白く浮んで見える路をたどつて行つた。學校に着くと既に山田君の命を受けた若い先生が懇懃に私たちを迎へて教員室へ導いた。山田君は中庭を隔てて教員室と平行に建てられた教室で、黒板を背にして教壇に立つて、山田君らしい微笑をうかべて、生徒の保護者たちに何か話してゐた。私たちは若い先生に案内されて、暗い廊下を通つて翼賛劇の稽古場へ行つた。机や椅子を取除いた普通の教室に、コードを張つて二個の電燈が薄暗くともされてゐた。指導者が二人、こ

れは内地人で、高雄の市役所に勤めてゐる人と銀行に勤めてゐる人とで、二人ともまだ學校を出たばかりである。青年が七八人、若い娘さんが三人、これ等は十六七歳から二十歳くらゐと思はれる本島生れの男女であつたが、一見したところ内地の農村の青年と別段に違つてはゐなかつた。稽古開始の合圖に電鈴が鳴つて、一同が賑かな雑談を止めて、二列に整列した。指導者の一人の號令で先づ國民儀禮が行はれた。それが濟んだ時に、「參觀者へ敬禮！」の號令がかつた。參觀者は本田君と私とであつた。いよいよ舞臺稽古であつた。衝立の位置を動かしたり、二三の小道具を配置したりして、再び電鈴の合圖で、世にも簡単な芝居が始まるのであつた。戯曲は「ラジオの朝」と「日の丸の旗の下に」と「軍夫の家」との三つである。何れも戯曲といふべく餘りに簡單であつた。そして殆んど特別の衣裳などなしに行はれ得られる程度のものであつた。しかし私はこの薄暗い俄造りの稽古場で、本島青年たちが私たちには聞き苦し



い發音と耳障りな抑揚とを響かせて、眞面目に熱心に稽古してゐるのを見てゐると、次第に私の身内が引締り、一種の嚴肅な氣持にさせられて行くのであつた。一幕終るごとに指導者が簡単な注意をした。全部の稽古が終つたのは、十時少し過ぎであつた。私はその場面の數々を、例へば一人の青年が田を耕してゐる科をするところとか、ある老人が庭で竹籠を作つてゐる科をしてゐるところとかを、はつきりと今でも記憶してゐる。私は山田君の事業に對して懷疑的であつた。しかしそれを無視したかのやうに、それとは無關係に、私の内の抒情的なものが勝手に興奮するのであつた。人の世における美といふものは、このやうなものなのであらうか。稽古が濟んでから、私はこの不思議な南海の一夜のこの上ない記念として、その謄寫版刷りの脚本を與へてくれることを、熱心に望んだ。それが何か聖なるものであるかのやうに。或は私がこの世に生を享けてゐる限りは、それを尊敬する義務を負ふものであるかのやうに。

私たちは皆の人に目禮し、何時の間にか父兄會を終つて稽古場へ來てゐた山田君にも挨拶して、辭去した。やはり星明りの野路を歩いた。本職の本田君が演技についての批評をいろいろと私に言ふのであつたが、私にはどうしたらよくなるべきものか、考へることが出來なかつた。ただ私は山田君との邂逅を喜び、その健闘を祈る氣持だけであつた。



## 船中にて

臺北で飛行機に乗りそこなつた私たちは、高雄から船に乗つて佛印に行くことになつた。そして高雄の滞在が一週間續いた。

いよいよ船に乗つたのは九月二十六日で、別しても暑い南海の太陽が容捨なく甲板を照りつける日であつた。私たちの乗つた船は三千噸ばかりの軍用病院船で、佛印に進駐した軍隊内に發生した不幸な病兵を迎へに行くものであつた。私たちの外にもなほ数名の便乗を許されたものがあり、それと軍夫として徴用に應じた臺灣本籍者の十人ばかりの青年を除くと、あとは殆んど看護兵と軍醫の人々であつた。私たちに與へられた席は船首の甲板から階段を降りたと



ころであつた。通路より二尺ほど高くした幾つかの區劃に分けられてゐて、疊が敷かれてゐた。水面に近いため、少し、海面が波立つと、窓々から飛沫が降り込んだ。十二疊に對して「定員十八名」の木札が板壁に釘づけにされてゐた。ドルメンの石のやうに丸く硬く大きい枕は、恐らくは多くの傷病兵の汗や氷袋から洩れた水に濡れたのであらう、どの枕にもしみが出来てゐて、そして人々の尊い苦悶のこの汗の痕があまり解らないほどに、枕全體が薄黒くよごれてゐた。疊も古びてゐて、縁が切れてゐるところが多かつた。この十八人分の席に、私たちは三人だけであつた。私たちは三人適宜に毛布を敷いて、枕にはタオルを巻いて寝た。暑いから何も着て寝る必要はなかつた。

翌日は甲板で兵隊さんたちが朝の教練をする靴音で目を覺した。私の仲間が私が一時的に關係した會社の若い技師と社員とであつた。十時頃私たちの席へ岩畔氏が「やあ、どうも氣の毒してますね」と怒鳴るやうに言ひながら、遊び

に來た。氏と私たちは高雄の旅館から一緒であつた。じつに豪放な闊達な人で、そして私は氏からずいぶんいろいろな話を聞いた。その二三を擧げて見ると、例へば「守、破、離」の説である。それは高雄の宿で二人で碁を打つたときの話で、人生のことは何事でも最初の修業中は忠實に法則を「守」ることであり、次には法則を「破」らうとして努力することであり、そして名人達人の域に達したものは、法則有るが如く無きが如く、それを「離」れた如くに行動することであるといふのであつた。それは私たちがたやすく理解することの出來る東洋の叡智とも言ふべきものであつた。——かやうに氏の話には、強烈な言葉が、人生を縦横に踏破つた趣を持つた言葉が、盛んに飛出すので、傳統的に食慾の小さい私たちの文章の中には、行儀よくは納らない傾向がある。

氏は軍關係の人であつたけれども、軍の力ばかりにたよつては東亞の經營が成功しないことを主張して、發展的な國民道德の建設の要を説き、偉大な指導



者の出現を待望するものだと言つた。氏の意見では、徳川時代は徳政であり、明治時代は法治であり、大正頃より經濟主權の時代が來たのであるが、今後の日本には道德と名譽と經濟生活との大きい綜合的な文化、言ひ換へれば全人的な文化が打建てられなければならないと思ふのだが、といふのであつた。因みにこゝで徳政といふのは道德が社會生活の基準になつてゐたといふ意味であつて、いはゆる借金棒引の特殊用語としての「徳政」をいふのではなかつた。氏は徳川家康の行政的な才能を高く評價してゐた。

また「宇内混同秘策」を書いた佐藤信淵を「あれは大した奴ですよ」と言ひ、山鹿素行については、「素行は若い時には相當な俗物であつたらしいですね。社鼠燻せられず、などと言つてゐるんですが、さういふことも自分の志を行ふためには躊躇なく行へと言つてゐますがね。そんな人だつたから、大成したときには、單なる道學者でない傑物になつたんだと思ひますよ」といふ感想であつ

た。社殿に住む鼠は焼き殺されることがない。強權の庇護に隠れる者は罰せられることがないといふわけである。

氏はまたアメリカに行つて要路の人々に會つた經驗から、私の質問に答へて、ハル國務長官や海軍長官のノックスなど、あんなものは凡くらですよ。やはりルーズベルトはともかく一應の政治家だといふ氣がしました、といふのであつた。

またある時、私たちの會話が日本の財界の人々の批評に移つたことがあつた。私は神戸で乗船して基隆に着くまでの船中で、退屈なまゝに船の讀書室から郷誠之助著の「財界隨想」といふ本を持出して、讀んだ。郷誠之助の先代は私の郷里の村から出たもので、今年の夏郷里へ歸つたときにこの財界の傑物の風貌の一端を知人から聞かせられたことがあつたので、私はもちろん見たことも會つたことも無いのであるが、一體どんなことを書いてゐるのだらうかとい



ふ無責任な出来心から読んで見たのに過ぎなかつた。読んで見て、それは勿論中學生程度の常識を出ない思想であつたが、しかしその思想を肉附けてゐる剛腹さが、膂力の逞しさが、私を驚かせもし、私を感嘆させましたのであつた。そのことを記憶してゐたので、私がそれを岩畔氏に言つたのである。すると氏は言下に、「さうですよ。一流の實業家はみんなどれもおんなじ型を持つてゐますよ。その剛腹さと、そしてこれがよいと思ふと一舉に強力な決断をすること、もう一つは面子を重んじるといふことです」と、手振り身振りを使つて豁然と言つた。私は少くとも今迄の實業界といふものが、人間の闘争場であつて、その主將たるもの、第一の素質は勇氣であることを知つて、今さらながら感慨深く思ふのであつた。さういふ世界が人生の底流であつて、今迄の文學などといふものは現象の表面に漂つてゐて右に流されたり左に往つたりしてゐたものに過ぎないかも知れないなどといふ氣がした。さういふ文化であつたがた

めに、今まで文化が發達するといふことは、人間を脆弱にすることだといふ古來の鐵則を作り上げてしまつたのかも知れないと思つた。

やがて私たちの會話は支那の文學の話に移つて、孔子や孟子や老子の批評が出た。その方面にも岩畔氏は博覽強記であり、一家の見識を持つてゐた。それから「どうも僕は日本の學者の仕事は、あんまり信用しない性質でしてね」と言つて微笑し、氏は「やはり今の日本の學者の仕事よりも昔の支那の學者が面白いですね。易經てえのは面白いですね。易斷は、あんなものは詰らないが、原典は面白いですよ。むづかしくて讀んでも僕なんかには三分の一くらゐしか解りませんが、でも易經だけは今度持つて來ましたよ」と言葉を結ぶのであつた。

岩畔氏は話しあきて立ち上り、いたづらさうに笑ひながら、「日本の今までの文士つて、みなどうもたよりにならないやうですね」と言つた。私は「そりや



あ、あなたがたが詰らないものを掴むからですよ」と應酬したのであるが――。私たちの船は、無電の命令によつて、ハイフォン入港の豫定を變更して、直接にサイゴンへ行くことになつた。私たちの病院船の生活が三日延びたわけであつた。小さい船であるから、海が荒れたら動搖が烈しいだらうと心配してゐたが、幸ひに平穩な航海が續いた。

私たちは疲れると甲板に出て海を眺めた。昔の大西洋航路やアメリカ航路の船のやうに、プロムナード・デッキ（遊歩甲板）などといふ洒落れたものはないので、船のどこかの棒につかまつて器械體操のやうなことをして、血液の循環を促す程度であつた。兵隊さん達は甲板でよく手旗信號の稽古をした。

或夜、兵隊と船員と便乗者との合同演藝會といふものが催された。そこは私たちの席に近く、言はば大廣間の中央の部分において行はれ、會場は一方の端の出演者の席に白布で被つた一個のテーブルが置かれたに過ぎなかつた。悲壯

を求める趣味が私の内にあつて、田舎の人たちが應召し故里遠くこの邊境の南海に來て、そして一夜を友ともて楽しむその機會に私たちが接することを得たことを、私たちの異常な經驗と考へ、襟を正して聞かなければならないかのやうに、豫め私の心を用意させるのであつた。若い兵隊さんたちの樂しさうな顔が集つた。片唾をのんで私は開會を待つた。種目は詩吟や浪曲や流行歌と言つた種類のものであつた。しかし會が始まつて、若い兵隊さんが出征兵を送る流行歌を歌つてゐるとき、あの例の歌詞を、それを兵隊が歌ひ兵隊が聽いてゐるといふ事實に、私の胸に迫るものがあつたけれども、會が進んで、與太者氣取りの若い下級船員が冗談を前置きにして氣取つた調子で歌ひ出したとき、私は裏切られたやうな索漠としたものを感じるのであつた。また若い學生らしい便乗者が、ギターかマンドリンかの曲を下手な癖に聲を震はせて歌ふのも、場違ひであり不愉快であつた。會衆の間にも明かに困惑したやうな失望の空氣が



たゞよつた。これはまだ對米英戦争がはじまつてゐない時であつて、單に佛印進駐軍の病兵を迎へに行くに過ぎない航海であつたので、しぜん差迫つた嚴肅なものを入々が感じてゐなかつたのにも依るのであるけれども、そしてまだ若い兵隊さんたちの間から相當數の出演者を得ることが困難であつたために合同演藝會となつたといふことは明かであつたが、矢張り兵隊さんたちだけで催さるべきものであり、慾を言へば、わが國にもつと美しい流行歌があるべきであつた。そうしたら素朴で無邪氣な、そして追憶の中に燐光を放つやうな一事件が、私の南海紀行のフィルムの中に残つたであらうと、私は思ふ。

階段を昇つて船首の甲板に出て、そこからもう一つ梯子のやうな階段を昇つた甲板に、談話室があつた。岩畔氏が脇目もふらずに、船の事務長と碁を打つてゐたので、私はそれを見學する。岩畔氏は盤面をその都度振動させて、たゞきつけるやうに、そして急速度に、烈しい攻撃的な石をうつ。喧嘩碁である。

大きいところを捕殺したとき、或は捕殺されたとき、氏はそのとき一と息ついて、快心な、若しくは照れ臭さうな微笑を觀戰者の私に投げるのである。いつたい氏の碁と來たら、朝晝晩と、三度私が談話室を覗いて、三度氏が夢中で碁を打つてゐるのを見たことがある。そして急速度の殺戮戰を幾回も幾回も展開するのである。私が側から調戲つて、「どうも岩畔さんの碁は、技倆には感心しないが、その精力に感心しますね」と言つたことがある。すると氏は即座に「いやあ、僕は一日に六十面打つたことがありますよ」と、はじき返すやうに言つた。それは一面に要する時間を十五分として、飲まず食はず十五時間の戦闘である。私は氏のがつちりした體格と船に乗つてから兵隊に刈らせたといふ無難作な、少し縞刈の大きい頭部とを眺めて、勝つといふ、いつでも捨身になつて敵と戦つて必ず勝つといふ修養の世界を、多年悠々と歩いて來た氏の肉體から發散する精力と精氣とに驚嘆して、つくづく彼が一個の人傑であるのを思



つた。

演藝會のあつた翌日も厳しい陽光が甲板を照りつける暑い日であつた。船は退屈な航行を續ける。運動不足のために私たちの食慾は減退し、それに何と言つても多年の都會生活のために都會化されて脆弱になつた私の胃の腑が、三度三度の井飯には辟易し始めた。この日私は物憂く部屋に寝轉んで、かつて自殺した小説家牧野信一の「南方譜」を讀んだ。仲間の一人が持つてゐたのを、退屈に借りたのであつた。これは力弱く味淡き作品であつたけれども、しかし讀んでゐる中に、私はそこに力の世界とは區別された一つの世界を見た。この不幸な作家の描いた夢が、幼くはあるけれども、しかし人の心を慰め人の心を力づけるのを、私は認めないではゐられなかつた。そして讀み終つたときに、私が心覺えにノートの中に書き記したことは、だいたい次のやうな意味のことであつた。それは私のはかない自己辯護であらうか？

——ツトルノンで中學校の教師をしてゐたマラルメは、その職業の苦しさを歎いて、出勤の途中、幾たびかロオヌ河に身を投じようとしたといふことであつて、彼の若い時代の詩「詩の贈りもの」は南部フランスの夜の暗さと彼の絶望との情調を響かせた傑作であると言はれてゐる。「自然がこれほどに偉大な頭腦を再び生むことは容易ではない」とロダンをしてその死を歎かせたほどのマラルメが、中學校の排斥される教師として、その生活において不幸であつた原因は、その生來の臆病さにあつたと言はれてゐる。また優れた「日記」の作家アミエルもまた臆病で優柔不斷であつたに違ひないと、私は思ふ。

私が大學豫科に在學したころ、或時外人教師が英語の書取の時間に、「臆病」といふ題目で、アディスンだかシェークスピアだかたいていそう臆病であつて、突然の來訪者があるとひどく狼狽して裏口から逃げ出した、といふやうな例を二三舉げて、その結論として「この臆病といふ不幸な性格的缺陷は、しばしば



偉大な人物を訪れるものである」と書かせたことがあつた。見苦しく臆病なことに、おいて人後に落ちない私であつたから、この短文を喜んで久しく保存してゐたので、今でも捜したらどこかにあるかも知れないと思ふ。私はずゐぶん自分の臆病を克服しようと努めた。自分ながら涙ぐましいと思ふ。しかし最近になつて、無理な努力をすることの愚かさを知り、その上居直ることを覺えた私は、よかれ悪しかれ私の存在は私の臆病さに負ふものであることを思ふやうになつた。外人教師に書取に出された文章で言へば、「臆病といふ性格的缺陷がしばしば偉大な人物を訪れる」のではなくて、臆病といふ性格的缺陷がしばしば偉大な人物を作るのではなからうか、と思ふやうになつたのである。マラルメの臆病さとその偉大さとは、相反する素質ではなくて、相寄り相扶けたものではなからうかと思ふ。私の経験では、世間の普通の偉い人といふものは、出會ひ頭に相手を一撃する技術を、殆んど例外なく殆んど本能的に體得してゐるも

のである。實業家の剛腹さは、その世界における鍛練から生れる。それで臆病な人は、その一撃に對抗することが出来ないで、交渉に敗北し、社會生活に敗北する。禪の第一歩は相手の間につられないことだと私は人から教へられたことがあるが、臆病でお人好しの者は完全につられてしまふ。そこで被壓迫者の精神が、はげ口を失ふために、それが内面化して、ちやうど鉢植えの植木のやうに、外に出るのを妨げられて内部において豊富な根を張るのである。この豊富な内面生活が、聰明な知性と高い理想主義とによつて、整理され、純化された場合に、マラルメの詩精神となるのではなからうか、と私は思ふ。そしてどんなにか多くの人が、マラルメの詩に感謝し、生きることの喜びを感じ、人を恨まず世を呪はずその酬ゐられない仕事をこつこつと多年續けたマラルメの生涯を思つて、慰められ勇氣づけられるであらうか。私自身、そんなことを思つて、出勤の途中にある多摩川を眺めることがある。



ああ、人生といふところは、徹するところに道があり、徹しないところにも道がある。そして太陽のきびしさと慈雨と、性質の相反したものがあつて、共にひとしく地球の生物を育てるやうに――。

閑話休題、高雄で乗船してから五日目の夜になつて、前方に燈臺の火が遙かに明滅するのが見え出し、街の灯らしいのも次第に近づくのであつた。私どもはみな急に活氣付き、甲板に上つて折柄の涼しい風を浴びながら、友と友と賑かに語り合つた。この爽かな心持こそは、人間が人間の營みを慕ふものであることの證據であつた。やがて船は次第に速力を落し、陸上との發火信號がしきりに交換される。その美しい光が私たちには、わが日本と佛印政府との協調の象徴であるやうに思はれるのであつた。灯の見える町は小さい灣の突端にあるフランス人たちの海水浴場であるとのことであつた。船はつひに進行を止め、がらがらと音をさせて錨を下した。こゝで水先案内を待つて、明朝サイゴン河

を遡るのだとのことであつた。私どもはなほ殆んど微動さへもしなくなつた甲板上で長い間星を語り合つたり、對岸への距離を論じたりしてゐた。

兩岸に森が迫り或は椰子の樹の彼方に稻田の擴がつてゐるサイゴン河を私たちの船が靜かに遡上し始めたのは、翌朝の九時頃であつた。安南人の漕ぐジャンクに遭ふことが次第に頻繁になり、やがて右岸に石油會社の白い倉庫の群れが現れ、いよいよサイゴンに近づいた。屈曲した河に沿つて、數多くの日本の汽船が碇泊してゐた。私どもは米の積取りだらうと想像した。かやうにして私たちの船は、十月一日午後一時半岸壁に錨を下した。對岸の日本の軍艦の甲板上で軍樂隊の練習が行はれてゐた。濃い緑の森に包まれたやうなサイゴンの街が前面に擴がつてゐた。折柄驟雨が襲つて來た。私たちは再會の日を祈つて、岩畔氏と別れた。氏は一是非僕のあるところへ遊びに來て下さい。又話させよう」と言つた。その逞しい力強い後姿を見送つて、私は氏に教へられ、氏に與



へられた情誼を感謝した。氏は迎へに來た自動車で、驟雨の中を立つて行つた。

### ハノイまで

サイゴンの目抜き通りの通りにあるホテル・コンチナントールに三泊した私たちは、十月四日午後七時半サイゴン發のハノイ行き列車に乗つた。千七百餘キロ、四百三十里、四十時間の行程である。

サイゴンでは、とにかく立派な街路樹や教會や商店の建物に刺戟されて、私の内面の視野に、パリの街の一劃が一瞬の間明かに、ちやうどフィルムの一コマのやうに閃き、そして次の瞬間にはもうパリではなくなつてゐるといふ私どもの記憶力の機械作用を、幾たびか経験したのであるが、しかしそのパリは今よりも歴史の何頁か前に没落してしまつてゐる過去のパリであつて、今日のバ



リではない筈であつた。

列車が動き出すと、私の怠惰な思惟の作用が、スイッチを入れられたやうに、ゆるやかに廻轉し始める。私は車室の片側に通じてゐる廊下に立つて、長い間暗い外を見てゐた。——私がパリにゐたのは、支那事變が始まつた當初の昭和十二年と十三年とであつた。ドイツの力が日に日に強く、パリへの壓力となつて加つて來るのであつたが、しかしその強い風を避けた日溜りには、彼等の文化があり、彼等の藝術があり、彼等の抒情の生活があつた。私はそれを一つの現象として受取つてゐた。草木が花を咲けば、やがて枯れなければならぬやうに、フランスは滅ぶべき季節を迎へようとしてゐた。そして今日から考へると、殆んどすべてのフランス人がそれを意識的無意識的に感じてゐたためやうに思はれる、當時はそれほどには思はなかつた、多くの小さい事件があつた。例へば、私はうらぶれた小商人の街であるドラゴン街に住んでゐたので

あるが、その街を外へ出たところに美しい教會の建物があり、そこが賑やかなサン・ジュールマンの大通りで、リップといふやや高級なレストランがあつた。私はその前を通つて、氣紛れにソルボンヌの聽講に通つてゐたのであるが、朝の十時ごろから、もうその店のテラスに一杯の麥酒のコップを前にして、幾時間も幾時間も表通りを眺めてゐる五十歳くらゐと思はれる紳士を、殆んど連日見かけるのであつた。私は今でもその紳士の顔を不思議によく記憶してゐる。いつも獨りであつたが、若し薄ぎたない犬でも連れてゐたら、まさしくドストイェフスキイの作中の人物であると思はれるやうな、憂鬱な顔をしてゐた。さうして死ぬべき日を待つてゐたのであらうか。そしてそれを誰も別に問題にはしてゐなかつたやうである。いつたいそんな馬鹿げた話といふものがあるであらうか。仕事がなくたつて、この忙しい人生である。しかしパリにゐた時の私はさういふパリの風俗の感化を受けて、パリの特色はじつに怠け者の



亂されない生活だと思ひ、言葉も解らないのに、カメラを下げ、旅行案内を持つて、名所から名所へ慌しく旅行し、暖いのかな光に叛いて名士訪問に多忙な日を送る旅行者を、パリの魅惑を識らないものだと思つてゐた。私の識つてゐるパリは、そのやうに虚無の巖頭に立つた文化であつた。さういふパリに時に息苦しくなると、責任の無い留學生生活の氣安さで、私は思ひたつたその日に田舎へ旅立つて、名もない村のゴシック風の古い寺院を見物したり、川に沿つて森のほつりを歩き廻つたりした。そんな風であつたので、私はフランスの田舎には限りない懐しい思出を持つてゐる。

そのやうなパリに反して、サイゴンは潑刺とした都會であつた。むしろ生硬な印象を與へる、パリと氣分において相反する都會であつた。その上商業上において重要な都會であるに違ひなく、十萬の華僑が住んでゐて米の取引に絶大の勢力を占めてゐるといふシヨロンの町が程近くにあることも、私ども畠違ひ

の人間が書くまでもないことである。私は佛印滞在中、たいていはシヨロンで製作される「コターブ」といふ二十本二十五錢の兩切を喫つてゐた。佛印で恐らく最も販賣量の多い煙草であるが、コターブとはタバコといふ意味だとのことであつた。いつの時代に煙草が佛印に輸入されたか私は知らないけれども、タバコが原住民の耳に「コターブ」と響いた時代が想像された。それが今サイゴンは人口十三萬を持つ西洋風の近代都市となつてゐるのであつた。

サイゴンで會つた日本人の人々も、若い人が多かつた點もあるけれども、一般に潑刺としてゐて、會つてゐて氣持がよかつた。私が臨時に關係した會社の人々と、支店長を中心にして一夜食事を共にし、食事が済んでから食堂のテラスで夜の更けるまで語り合つたが、伸びやかなそして親しい氣持であつた。彼等は會社の社員ではあつたが、會社を通して祖國の國策に奉仕してゐるといふ氣持を持つてゐた。その社會が人間を殺して使ふか生かして使ふかといふこと



が、重大な問題であることを私は考へた。

私たちがサイゴンに着いた日が、市立劇場で催される醫學展覽會の開場式の當日であつて、その前の廣場には百臺に近いと思はれる瀟洒な自動車が並んでゐた。それはフランス人の主張では、「住民の衛生思想を向上させ、近代科學を理解させようとする」厚生施設であつた。それには違ひなかつたが、しかし何か宙に浮いた感じであつたので、さういふことをするのを人類は文明と呼んでゐるのであると、私は心に呟いたのだつた。――

列車はひたむきに夜陰の路を走る。空は曇つてゐるらしく、朧月夜であつた。安南山脈が延びて丘陵性となりそして海岸に迫つてゐるその森林地帯を通つてゐるらしく、暗く鬱蒼とした森が、行けども行けども窓外に續いた。森の絶えたところには、仄明りに草原が起伏してゐて、そこに數匹の螢がその可憐な孤獨な舞をしてゐた。私はそのやうな草原に、今にも猛獸が、豹が出て來

るかやうに、待ちうけてゐた。一匹の仔を連れて悠々と歩いてゐると言つたやうな、それは多分に映畫といふ人間の物好きな遊戯が馬鹿正直な私たちの頭腦のメカニズムに與へた過去の作用の結果であつた。言葉を換へて言へば、アメリカの映畫資本が佛印に旅をしてゐる私にさういふ精神作用を結果させてゐるのであつた。その資本家はいまの現在何をしてゐるだらうか。恐らくはトリック澤山の猛獸映畫を作つて素晴らしい利潤をあげたことなどは、忘れてしまつてゐるであらう。しかるに私は私自身の大脳組織に與へられた刺戟の結果としての精神作用を、それを與へられたといふ事實を忘れてしまつて、忠實に實現しながら、おまけに多少は甘美な私自身の旅情で、その空想を包んでゐるのであつた。順化の近くで子供が虎に攫はれたといふ新聞記事が出たのは、そんなに古いことではないといふことであつた。昔は猛獸の出現を警戒して、この線は夜間の運轉を休止したといふことであつた。それはさうかも知れないと私は



思ふ。しかし私の精神のスクリーンに明滅する森の中から首を振るやうにして出。来る豹の形體は、明かにフィルムはどこかの一場面であつたに違ひなかつた。第一何故私は豹を空想して、虎を空想しなかつたか？——私は自身の空想を慈しむ習癖を滑稽であると思つた。

私のきらひな寢臺車の夜であつた。ドアを閉した部屋の中には、むつとするむし暑さが籠つてゐた。一室に二人で、私は上段の寢臺であつた。私の同室の客はその晩汽車の中で初めて顔を合はせた五十歳あまりの逞しい體軀の、頭を毯栗に刈つた實業家であつたが、私が部屋に戻つて來た時には、部屋の電燈を暗くし、ビジャマの胸をはだけて、寢苦しさうに眠つてゐた。私は寢首をかくといふ講談本か何かの場面を想像した。相手は憎々しいほど精力的な肉體をぶざまに投げ出して眠つてゐる。人間の精神といふ氣紛れな活動體が、どんな機會にどんな事を人間にさせないとも限らなかつた。尾骶骨のやうに何分の一か

何百分の一に退化してはゐるかも知れないが、人間に殺人衝動といふものが無いとは限らなかつた。このやうな生活の異常時に、精神のそのやうな潜在的要素がどうして浮び上らないとも限らなかつた。ドストエフスキイの小説に出て來るラスコルニコフは……。その時その太つた紳士が偶然に（？）眼を開いて、私の顔を見た。私たちの視線が合つた。その眼には人間が人間に對して持つ恐怖と憎惡とが、太つた人でしかも神経質な人が持つ病的な警戒心が、輝いてゐた。この憎惡と恐怖とは晝間の生活では社會の慣習と常識とに包まれてしまつてゐて、私たちは相手を信頼し、安心して儀禮と友誼とで交るのである。半睡時に現れる人間のこの原始的な感情の強烈な視線に狼狽して、私はびよんと一つお辭儀をした。紳士はそれには答へないで、しかし安心したらしく、頭の向を變へてすぐ眼を閉ぢた。私のために熱帶の森の中を行く「眞夏の夜」の旅を象徴する薄明りの中の暗黙の闘争は、その一瞬で終つた。梯子が無かつ



たので窓のところに足をかけて、音を立てないやうに冷汗の出るほどの要心をしながら、私は上段の寢臺に登つた。

寝てゐても次第に皮膚が汗ばんで来る程度に暑かつた。寢臺は幅は割合に廣かつたが、私は轉り落ちさうな氣がしてならなかつた。寢臺に杵がなく、轉落するのを妨げるものは寢臺を吊つてある革の紐だけであつた。それに列車の振動が烈しかつた。それはその翌日の晝飯の時の食卓で私が「ずゐぶん揺れますね」と言つたときに、この同室の紳士から教へられたのであるが、佛印の鐵道はレールが舊式で細く、日本の東海道線などに使用されてゐるものの半分の重量であるためであるとのことであつた。私はあえて睡眠を求めようとはせず、頭部のところの電氣をつけて、サイゴンから持つて來た二三種の新聞を讀んでゐた。當時サイゴンの新聞はまだまだ英米に好意を持つてゐるらしいことが、獨ソ戦争の狀況を傳へる文章やその他の記事の筆致にどことなく現れてゐた。

翌日は一日車中の生活であつた。列車はやうやく平坦部に出たので、窓の外には廣く水田が望まれた。日本の田圃のやうに小さく仕切られてはゐるが、しかし一見して恐らくは田植をしたきりであとは天候に任せておくのであらうと思はれる程度に貧弱な作柄であり、氣紛れに穂を出した田があれば、まだ田植をしたばかりのところがあり、水に浸つて牛を使ひながら鋤き起してゐるところがあつた。雨季とか乾季とかがある以上は、それと睥み合はせて耕作すべき筈であるとするれば、かやうに稻の成長が遅速まちまちである理由は、どこにあるのであらうか。かやうな水田に隣つて、ところどころに耕作のされてゐない、芝生に被はれた地面が、小區劃をなして到る處にあつた。芝生は短かく刈られてゐた。二三尺ほどの緩かな高低をなしてゐて、その高い部分に凹みがつてあつた。それが原住民の墓地であつた。凹みの形は單純な圓形であつたり、圓形に柄を附けたちやうどわが國の昔の鏡の形であつたり、亞鈴のやうに



二つの圓形をつないだ形であつたり、或はまた少年が描く最も簡単な人體の形であつたりする。墓場の上に人體を模した形を表はすといふことは、私は人間心理の必然であつて、わが國の古墳などにもこれに類するものがあるだらうなどと思つた。供物などをした形跡はなく、またその様式も考へられなかつた。放牧された二三頭の牛がこの墓場の草を喰つてゐるところもあつた。

椰子の葉蔭に見える住民の家屋は、草で屋根を葺いた堀立小屋であつた。壁も屋根と同じ草の莖を用ゐたものであつて、家はもちろん小さく、靱などを收穫した場合にそれを置く場所が家屋内にあらうとは考へられなかつた。少し上等の家であらう、棟に千木に類した裝飾を附けた家もあつたが、これは日本の昔の家屋にも見られるものであつて、家を裝飾しようと思へる場合に最初に人間が考へつく方法だらうと思つた。

住民はそのやうな家に、一日の勞働を終へて、土間の上に敷いたアンペラの

上に、或は涼み臺のやうな簡単な寢臺にアンペラを敷いて、燈火のない暗い夜を迎へ、眠りにつくのであらう。その枕頭をさまよふものは、昔のわが國の山間の農民の間に語りつがれた狐や狸や、その他の迷信と傳説とにおけるやうに、虎とか何とかの守護神や妖魔であつて、彼等はそれに脅かされたり護られたりして、原始の夢を結ぶのであらうと思つた。それは悲劇のない生活である。悲劇以下の、或は悲劇などとは関係のない、草木のやうに生れ草木のやうに死んで行く生活の姿であると考へられるのであつた。

停車場に着くと、何處からともなく、たくさん安南人が列車の左右兩側に集つて来る。その大部分は茹玉子やバナナや草の葉に包んだ餅などを賣る人々であつた。両手を出して慈悲を求めものには、まだ幼い子供があり、立つては歩かれない不具者があり、盲目の老婆などがあつた。驛員が來ると、そのやうな物乞ひやもぐりの賣子たちが蜘蛛の子を散らすやうに逃げる。驛員が石を



投げて更に追ふ。驛員は彼等と同族である安南人である。多くは子供であるそのやうな賣子や物乞ひは、退避線に停止してゐる貨車の間に逃げて、車輪の蔭から驛員の去るのを窺つてゐる。そして時を見計らつて再び列車に近づくのである。銅錢を投げ與へるのが正しいかどうかを、私は躊躇してゐた。ポオドレエルが好んで描きさうな蓬頭垢面の、榮養のわるい子供たちで、夫のやうな本能的な悲しい聰明さに輝く眼を持つてゐた。このやうな住民たちにどういふ經濟生活があるのか私には考へられないのであつたが、四等車は超満員で、驛ごとに原住民である乗客が大騒ぎして窓から出入する。彼等はそれぞれの荷物を持つてゐた。

私は退屈な旅をつづけ、窓に立つて外を眺めながら、さういふ住民を見るにつけ、フランス文學でいふ「エヴァ・ジョン」(逃亡)といふことが可能かどうかを思つて見たりした。それは精神の或る状態にある一個の人間が自分の屬する

社會の或時代の空氣を呼吸しがたいものに感じて、自分の精神の窒息を救ふため、暫く植民地などへ逃避することを言ふのである。逃避は卑怯な解決方法であるといふことは出来るけれども、しかし社會の壓力のために萎縮し滅亡して行く精神があるとすれば、逃避は時に鬱血した人に對する深呼吸くらゐの効果はあるであらう。詩人ラムボオのアフリカへの逃亡は、彼の詩作活動があまりに壯麗で、その逃亡があまりに突然であり、その逃亡後の彼の變貌があまりに烈しく、そしてあまりに悲劇的であつたために、それはフランス文學における一つの傳説になつてしまつてゐる。彼の詩にウバニシャットの影響があると論じた批評家があるが、彼にはたしかに東洋的なところがあつたのであらう。ヴェルレーヌとの放浪的な生活にあき、ヨーロッパの社會に虛妄を感じると、彼はすべてを、榮光も友情も藝術も捨てて、ひたむきに、アラビアに流浪し、アフリカに逃亡した。そこまでは何か私たちの胸を刺戟し、夢をそそるものがあ



る。この點に感動したフランスの十九世紀のロマンチズムの文化が、自らの感動に溺れることに急であつて、ラムボオのその恐るべき變貌に一つの神話を作つてしまつて、それ以上にその變貌の原因をもう一步進んで探究しようとはしなかつた。逃亡してからは腑抜けのやうにラムボオが一個の俗物となつてしまつたことを以つて、天才に必然な傷ましい運命に殉じたものであるかのやうに、その墮落そのものまでも美しい詩の一部分として空想しようとする。しかしいま私は佛印の列車の中で思ふのであつた。

——ラムボオが流浪したアフリカは無人の荒野でもなければ、夢の國でもなかつた筈である。やはりある程度に人間の奸智の網が張り廻されてゐた搾取的植民的であり、そしてしよせん彼はその網に生理的生命を託さなければならなかつたのである。彼は原住民を相手に貿易を營む冒險的な商社の社員になつた筈である。蓬頭垢面の裸體のアフリカ人にはならなかつた。ところで十九世紀

などにおける植民地の實業家などといふものは、過剰を極めた、旺盛な、恐るべき生活力の液汁の容器みたいなものであつたのではなからうか。その液汁のために身を悶え、夜も晝も功名心に驅られてゐた動物類似の性格者であつた筈である。ラムボオは流浪の旅にやうやく飢えたとき、幾たびかは原住民に同化する生活を、そしてヨーロッパ文化に叛逆する生活を考へたであらう。しかしそれは不可能なことであつた。そこで彼が衣食の必要に迫られて剛腹な冒險的な企業家の前に叩頭したことは、彼がやがてその監獄部屋の鐵の統制に屈服し、そして滅亡することであつた筈である。かやうな企業家は道樂に詩人などを飼つておくほど物好きでも寛容でもなかつたに違ひない。アフリカにおけるラムボオの生活は、何の特異さも示さない平凡な社員であつたと傳へられてゐる。それが屈服し換骨奪胎されたラムボオの生ける屍としての姿であつたのではないだらうか。ポオドレエルが詩人を天翔ける信天翁にたとへて、それが捕



へられ翼を傷けられて甲板で下等な船員たちにいたづらをされる時の腑甲斐なさを歎いてゐるが、どれほど詩人ラムボオが獨立不羈な性格であつたにしても、かやうな企業家の前では、結局甘いものであつたに違ひない。――

私は思はずラムボオを語り過ぎたやうであるけれども、結論としては、結局人生には逃避などといふ境地が無いと言ふことである。ラムボオのやうに植民地へ旅行することは他日の新しい活動に備へる精神の保養のためでなければならぬのであつて、純粹な逃避であつてはならないのである。昔から生命を惜んで逃亡する軍隊に却つて死傷数が多いやうに、逃亡すれば敵は力を二倍にして追撃するものであるから、どんな意味においても逃亡といふことは生活における有形無形の敵の鋭鋒を避ける方法ではない。かういふ理外の理といふものは、いはゆるリアリズムではないから、十九世紀の文化が認識を拒んだ眞理なのではないだらうか。

列車は私の退屈な思惟を、と言つても私はこの退屈な思惟を私の特權のやうに思ふのであるが、その思惟を乗せて、平坦な、ただ一つのトンネルも無い路を走る。ちやうどサイゴンとハノイの中間あたりのツーラン附近では、土壌が雪のやうにまっ白であつた。同室の實業家の説明に依ると、これは硅砂であつて、硝子の原料として昔日本の企業家が搬出を計畫したが、佛印に他國の産業力が加はることを嫌つた佛印政府がそれを禁止したといふことであつた。

車中二日目の夜が明けると、もうハノイも遠くなく、いはゆる紅河デルタに入る。見渡す限りの平原に、ちやうど日本の農村のやうに叢林に囲まれた部落が、遠く近く去來するのであつた。これ等の部落にはその部落の護りであるかのやうに、カトリックの教會の塔が高く聳えてゐた。眼の届く限り續く稻田はそれまでの安南地方に較べてずっと美田である。目的地に近づいて、私たちの氣持も活氣づいた。六尺禪をして裸で網を以つて魚をとつてゐる原住民があつ



た。

午前十一時ごろハノイ停車場に着き、ホテル・メトロポールの二階の一室に旅装を解いた。サイゴンでもさうであつたが、日本のホテルなどに比して、部屋ががらんとしてゐて広い。スイッチを廻せば、天井の大きい煽風器が最初は物憂い音をたて、次いで暑苦しい呻り聲に變つて、烈しく廻轉する。私はとりあえず湯につかつて、四十時間の車中の脂汗を流した。このホテルは私の佛印旅行中における湯の出る設備のある唯一つのホテルであつた。熱帯であるだけに、たいていは水浴をするものらしく、どこのホテルにもシャワーの設備があつたが、熱い湯の出る設備はなかつた。しかし私たちにとつて汽車から降りて宿に着き、そして湯に浸りながら、遙かに來たことを思ふ瞬間は、この上なく楽しいのである。

街路に太鼓の音がする。窓から見下すと、日本の獅子舞の獅子頭を冠つた人

が行き、數人で行燈の如きものを捧げて練つて行く。この行進に伴ふ太鼓の響であつた。粗服を纏つた跣足の子供が、無表情な顔をしてぞろぞろとついて行く。この日は中秋満月で、安南人のお祭りの日であるとのことであつた。

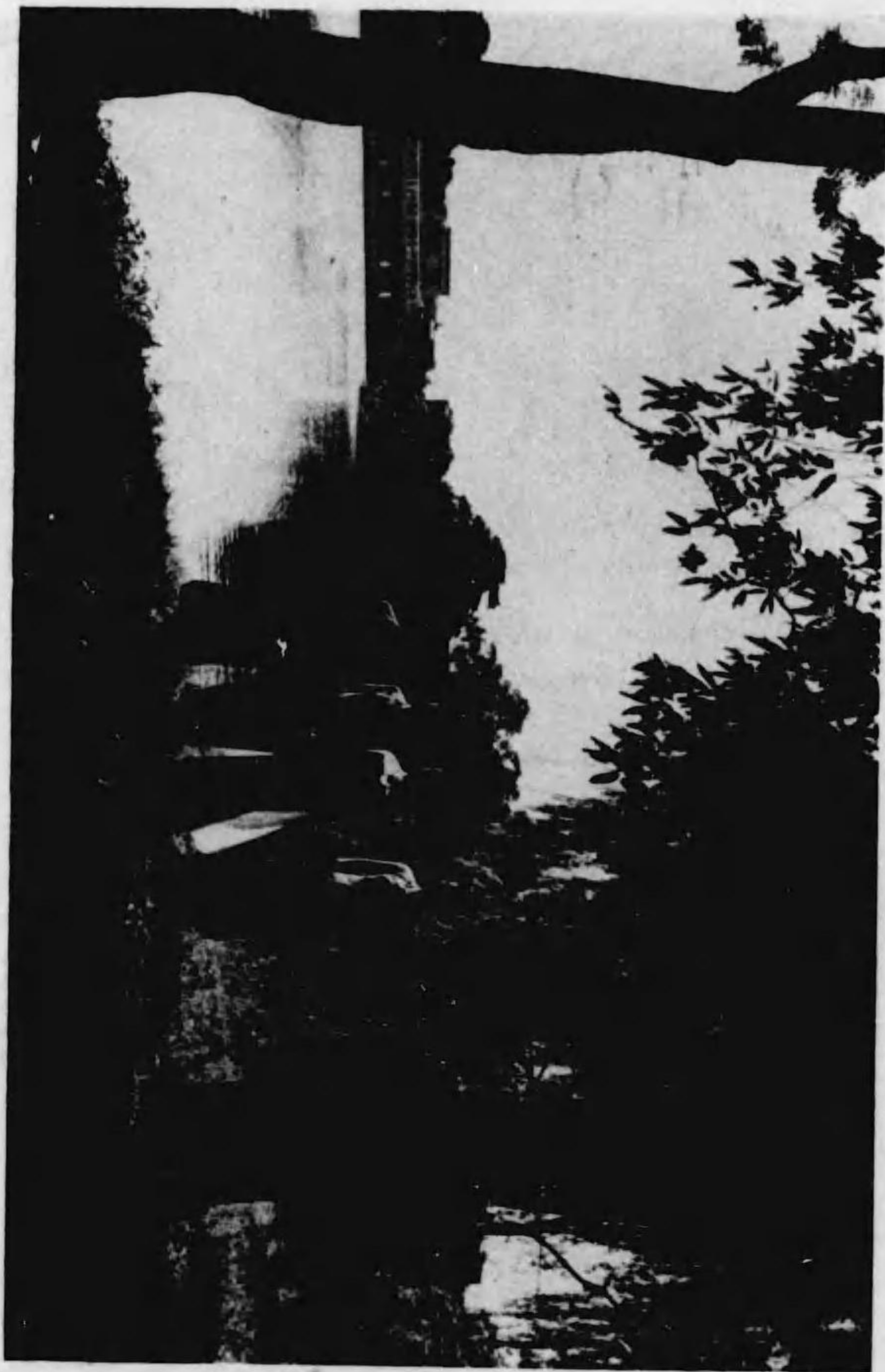
奥君に案内されて街を歩き、二三の日用品の買物をした。そして夕方、いはゆるプチ・ラック（小湖）の湖畔にあるキャフェのテラスで休憩した。折しも對岸の街路樹の茂みの上に、團々とした赤い満月が出て、その影を小波一つ動かない湖面に落した。

ホテルで晩飯をすましてから、私は葡萄酒の酔を醒し、私の閑雅な食慾には鈍重過ぎる料理の消化を促進するために、今度はただ一人で小湖の湖畔に出て、それを一周した。湖中の小さい島に玉山寺があつて、木の橋で渡れるやうになつてゐる。岸の山門に「山高水明」「影動龍蛇」の句が左右の門柱に書かれてゐるが、水清きにあらず、支那の文學ほど現實無視の文學はないと思つて、



更に見ると「臨水登山一路漸入佳境」「尋源訪古此中無限風光」などとあつた。そしてさういふ玉山寺の門柱の傍の薄暗いところに、榮養のわるい子供が野良犬のやうに地面に寝てゐるのである。さう言へば、フランスのすべての公共の建物に、それが紋章であるかのやうにきまつて掲げられてゐた「自由、平等、友愛」の文字も、現實を離脱してゐて、それを實現しようといふわけでもなかつた意味において、即ち抽象的な文字を愛する意味において、佛支は相似てゐると私は思つた。そしてフランスと支那とは東洋と西洋との半身不隨になつた二個の老大國である。

とにかく空が美しく、月が美しかつた。大きい街路樹が茂つてゐて、月夜の密林の中を散歩してゐるやうな心持であつた。



景風(湖小)クララ・チアノノハ



## 佛印覺え書

佛印滞在二ヶ月餘の旅をへて歸つて來たのであるが、いま私は佛印の各地、ことに滞在期間の大部分を過したハノイで人々から受けた厚意を、しみじみと思ひ出して嬉しく思つてゐるのである。このやうな愉快的旅行をしたのは、私の今までの生涯になかつたことで、それは厚意といふやうな通り一ぺんのものではなく、佛印で私が觸れた同胞の人々の人間としての美しさに、いま私が驚嘆してゐるとでも言つたら、それが私の心持に近い表現である。私は私と一緒に仕事をしてゐた、といふより世話になつてゐたある會社の若い人々の私のために催してくれた送別會の一夜の、和やかなそして張りのある愉快的集



りを忘れることが出来ない。それに較べると、何と味氣ない東京の生活であらうと、私は思ふのである。

歸つて來て以來、「佛印人は日本人に對してどういふ感情を持つてゐますか」といふ質問をよく受けるのであるが、それに對する私の解答はいつも簡單明瞭であつて、「日和見ですよ」といふのである。實際、佛印人の心境を知ることが必要であらうけれども、しかし今後佛印人を信賴させて行くことが出来るかどうかといふ問題から言へば、佛印人の現在の心境如何はあくまで従の條件であつて、一番根本的なことは、實際に佛印で活動する日本人の素質であり、それが生きて働く國家の政策を通してどう表現されるかでなければならぬと思ふのである。それでよく文化工作といふことが言はれるやうに、佛印人に日本國家の優秀性を知らせるといふやうなことが行はれるとしても、それが全く無益であるといふ譯ではないけれども、私がハノイに滞在した印象から言へばまづ

文化工作は佛印に働いてゐる日本人に第一に施されるものだといふ氣がする。外地にゐる日本人に對する文化工作といふことは、やや突飛で變なやうであるけれども、要は外にあるのではなくて内にあり、確立さるべき方針に沿つて活動する日本人そのものの素質にあるのだと言ひたいのである。

日本人の人間としての美しさ、それがしかし直ちに共榮圈の經綸に成功する所以であるといふことは出来ない。

私が佛印に滞在することの久しい人で現在はある商社の重役をしてゐる人に晩餐に招かれて、その席上で聞いた話であるが、佛印に來る會社員は明瞭に二つの範疇に分れて、一は南方發展組であり一つは貯金組であつて、貯金組の方が力が乏しいけれども無難であるのに反して、南方發展組は始末に終へないといふことであつた。いふ迄もなく南方發展組とは、祖國の南方發展の礎石とならうといふ大いなる考へを抱いて進んで渡航したもののことであり、貯金組とは



どの會社でも官廳でも外地手當があつて、内地にゐる時の三倍若しくは四倍の所得があるやうにされてをり、その上に社宅とか旅費とかのいろいろの有利な條件が附けられ、しかもハノイあたりでは物價が騰貴したと言つても東京程度の生活費で充分に暮せるから、心掛けによつては相當の貯金が出来るので、それを目指す人々のことである。私個人の経験から言へば、南方發展組の人々の方が人間として情味が厚く、友人として楽しいのであつたが、それは兎に角としてこの南方發展組のその立派な志が會社なり官廳なりの組織の内に生きて働かないといふ事實は、それがいつも粹をはみ出して無駄に腐らせられるといふことは、まことに悲しいことである。このやうなことは、佛印ばかりではなく、どこの會社にもあつて珍しくも何ともないと言へばそれまでであるが、これくらゐ勿體ない人間の尊い力の浪費はないのである。今迄の會社や官廳には人間を殺して使ふ、生きのいい奴は邪魔にするといふ傾向があり、これは明か

に統率者の缺陷である。阿諛し唯一に一身の安泰を圖る人間の方が使ひ易いからそれを重要視するといふことになり勝ちである。また夢想的なロマンチックな性格の人はむやみと現實を理想的に考へて、煩瑣な社會の實際を無視する傾向があり、自らの屬する官廳なり會社なりを、つひに自らの志を容れるところでないと判断して、酒などを大いに飲んでわづかに己れの志を慰め、そして與へられた事務を怠り、他人に迷惑をかけることになる。これは使はれる者の至らない點であつて、結果として社會の害毒となる。今日の、たとへ民間會社であつても、その統率者の地位は國家の公職であるから、封建制度時代のやうな下僚を自己の所有物視する態度は嚴に反省されなければならない筈であり、他面青年の放漫な精神主義もまた餘りに獨善的抒情に過ぎるものである。

私がハノイに滞在したのは、對米英戰開始の直前であり、人々は何時かは戦が行はなければならないことを知つてゐた。しかし私は去年の十月一日にサ



イゴンに着いたのであるが、サイゴンで會ふ日本人の人々が何か颯爽とした印象を與へて、東京の知識階級の人々のやうに神經質になつてゐないのが、不思議でもありまた愉しくもあつた。戦争が起ればその地理的位置から考へて、サイゴンは兵站基地ともなり爆撃下に曝されるものと想像されたのであるが、そこで人々は却つてのんきな世間話をして、戦争のことなどは殆んど誰も意に介してゐないかのやうであつた。ハノイとてもそれと同じことで、サイゴンよりは多少安全ではあらうけれども、しかし少くとも一時的には日本本土との交通が危険になり、籠城の覺悟を要するものと思はれるのであつた。アランが、戦場で躊躇してゐる時が一ばん恐怖に脅かされる時で、どうしても果さなければならぬ義務を遂行してゐる時には、恐怖に打克つことが出来るものであることを語つてゐるが、私はハノイやサイゴンで會つた若い會社員の人たちが内地の大阪や東京で見る人たちよりも楽しさうに生活してゐたのは、一應み

なの方が腹を据ゑてゐたからであると思ふ。この生命の危険に對して腹を据ゑてゐるといふことは、人間の心を淨化し、人間の精神を非常に美しくする。

しかしまたそのことが、佛印などにおいて事業をしてゐる會社などの内部の統制を困難にしてゐる傾向があつた。今日の會社では社長なり重役なりをしてゐるやうな人たちはいはゆるわが國の資本主義の興隆期に財界で育つて來た人々で、學校を出て會社員になつたときは何れ將來は財界の然るべき存在になるんだといふ個人的な希望によつて武裝して、多くの困難に打克つて來た百戰練磨の士である。だからその人たちから見ると、今日の若い者のやることは見てゐて齒痒いほどだらしがなく、事務に不熱心で、事業に對する研究心が足りないといふことになる。しかし一方今日の若い青年社員は、ことに外地におけるやうな場合には、將來社長にならうとか重役にならうとかいふやうなことは、誰も直接的には殆んど考へてゐないのである。何時でも召に應じて立つ心の用



意があり、その心情はますます冴えて、考へ方は言はば形而上學的である。形而上學的といふ生硬な表現は適當ではないけれども、それは恐らく萬葉集の最も美しい和歌の精神に通じるものであり、いはゆる防人の心を心とする美しいものであらう。その美しさが私の心をうつたのであらうと思ふ。そしてそれは社長の意を迎へて會社の仕事をする心境とはなりにくい。

私はハノイを飛行機で出發する二日前に、ハノイ情緒を紹介しませうといふある人に連れられて、有名なハノイの藝妓街カムテンに行つた。ドアを排して入ると、子供のやうな安南娘が四五人ゐて、賑かに客を迎へる。私たちはその部屋を突切つて、裏側の階段を昇つて三階の部屋に連れられて行つた。階段は家の背面の壁に沿つて作られてゐたので、屋根の僅かな庇が出てゐるだけであつたから、折柄の小雨が私たちの酒でほてつてゐる顔に、快くつめたく觸れた。この雨にも濡れやうといふ階段の踊場のところで、私の足の爪先に當つた

ものがある。驚いて見てみると、莫産を被つて眠つてゐる人間のからだか、そこに三つばかりあつた。私たちは部屋に入つた。すると私たちについて上つて來た安南娘が、階段に寝てゐた男の一人を起して、椅子を配列したり下へ行つてビールを運んで來たりする用事を言ひつけた。子供のやうな安南娘と言つたのは、それはそれ相當の年齢ではあるらしいのであるが、安南人は日本人より小さく、私たちには子供のやうに見えるからである。彼女等がこの店の藝妓といふわけであつた。部屋には支那のものらしい掛軸や聯句を彫つた木札が掛けてあり、隅には支那の瓶がおいてあつたが、何となく私たちには殺風景で、そして薄暗く、却つて旅人の情をそそると言つた感じであつた。間もなくそれはさういふ營業所があるのか或は街を流してゐたのを呼入れたのか私には解らなかつたが、ちよつと親子連れと思はれる三人の、即ち母親とその子である男と女の藝人が這入つて來た。莫産を敷いた一段高くなつたところに坐つて二十四



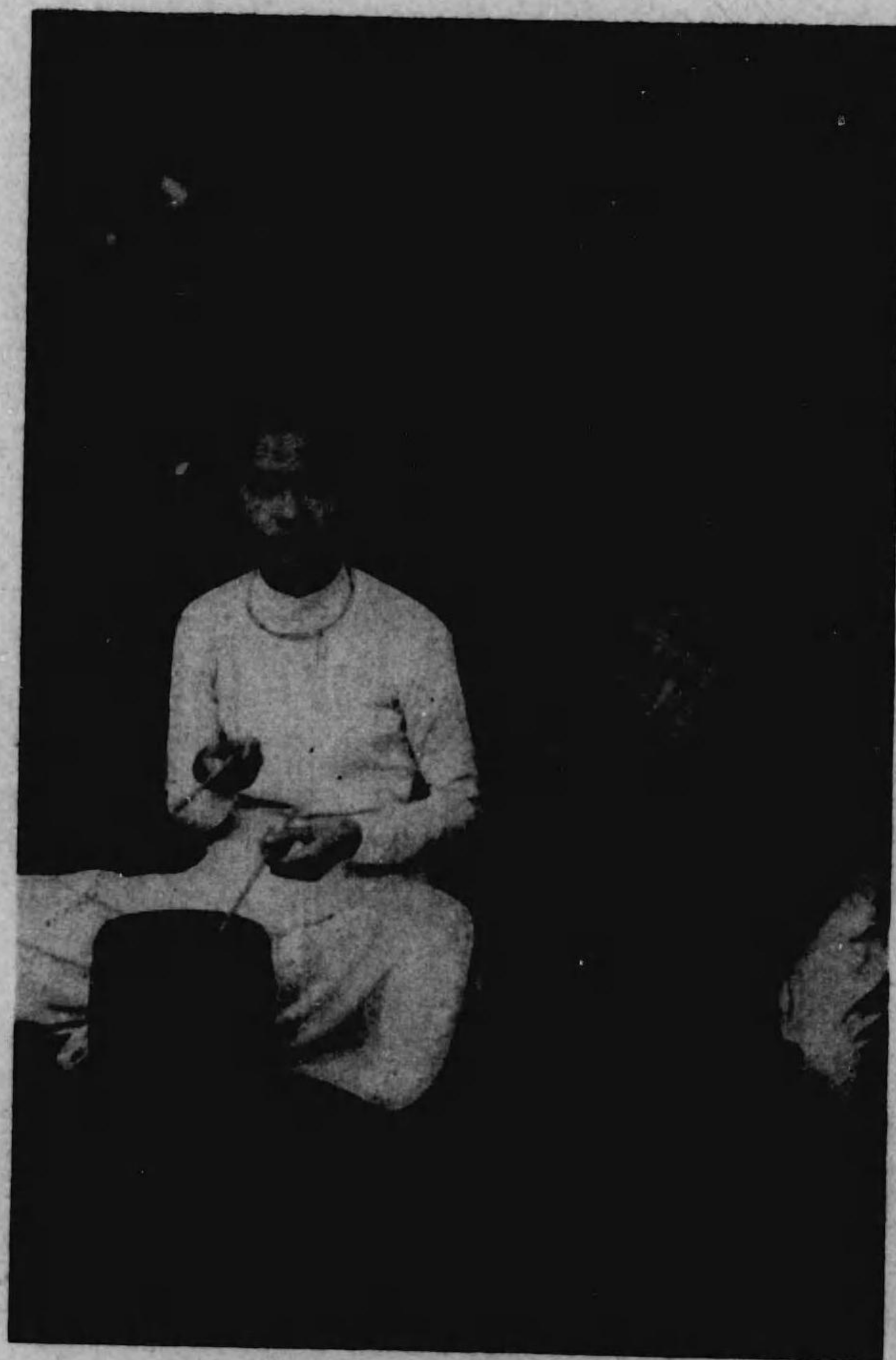


安南の藝人

五歳と思はれる男が總のさがつた三味線を弾き、母親らしい女が簡単な木琴のやうなものを叩きながら歌つた。娘らしいのは小さい太鼓を時々烈しく叩いた。怯えてゐる猫のやうに、或は熱病患者のやうにヒステリカルに光る三人の眼が、私にはひどく印象的であつた。餘韻嫋々とても形容すべきなのであらうか、その音楽はその騒々しさの中に、まさしく東洋風の寂しさと暗さを持ち、それでゐながら豊かさを藏してゐるかん高い調子のものであつた。私を連れて來た人は、追分であるか甚句であるのかは知らないが、とにかく日本の昔の民謡を歌つた。藝人たちはそれに調子を合はせて三味線を鳴らしたり太鼓を叩いたりした。その時ほど私の心に、昔の日本人の、その庶民の、センチメントの寂しい清純な美しさが無條件に了解されたことは、かつて私に無かつた。それは私には一つの発見であつた。すなはち内地にゐるとさういふセンチメントが私たちの血や肉に過剰であるがために、それ故に餘り日本的な、或は東洋



五歳と思はれる男が總のさがつた三味線を弾き、母親らしい女が簡単な木琴のやうなものを叩きながら歌つた。娘らしいのは小さい太鼓を時々烈しく叩いた。怯えてゐる猫のやうに、或は熱病患者のやうにヒステリカルに光る三人の眼が、私にはひどく印象的であつた。餘韻嫋々とても形容すべきなのであらうか、その音楽はその騒々しさの中に、まさしく東洋風の寂しさと暗さを持ち、それでゐながら豊かさを藏してゐるかん高い調子のものであつた。私を連れて來た人は、追分であるか甚句であるのかは知らないが、とにかく日本の昔の民謡を歌つた。藝人たちはそれに調子を合はせて三味線を鳴らしたり太鼓を叩いたりした。その時ほど私の心に、昔の日本人の、その庶民の、センチメントの寂しい清純な美しさが無條件に了解されたことは、かつて私に無かつた。それは私には一つの発見であつた。すなはち内地にゐるとさういふセンチメントが私たちの血や肉に過剰であるがために、それ故に餘り日本的な、或は東洋



安南の藝人



的な宿命觀の濃厚なわが國の昔の民謡が、私たちには藝術であると考へることが出來ず、若しさう主張する人があると腹が立つといふことである。私の生家は田舎の街道に隣つてゐて、山地の方から平坦部へ、その都市の方へ、米や材木を運搬する馬車挽きが夕方殆んど積荷を空にして、或は僅かな都會の商品を載せて、薄暮のその街道を歌ひながら歸つて行くのであつた。それは歌ふ自分の聲に自分から恍惚としてゐるかのやうに楽しいものであつて、恐らく追分とか木遣節とか言つた種類のものであつた筈である。

私は安南藝妓の説明とその感想とを、あまりに長く書いたやうであるけれども、それはしかし露ほども浮氣ごころで言ふのではなくて、そんな機會ではあつたが、日本古典のほんたうの美しさを知ることが出來たのが、嬉しかつたからである。

私はかつて日本人の性格を考察した一文を書いて、われわれ日本人の間に



は、言はば神的な道義が嚴然と確立してゐるが、人間的道德が等閑視され輕蔑さへもされてゐることを指摘したことがある。佛印において私が會つた人々の胸に迫る人間としての美しさ、しかもそれにも拘らず佛印における日本人の事業が、必ずしも人の和を得てうまく行くといふわけに行かない所以は、日本人のおのおのがその生命の内面に持つてゐる神に對して等しく敬虔であるが、その對人的な德義が組織内において力強く腕を組むといふ文化が、まだ充分發達してゐないからではなからうかと思ふ。

私がハノイに着いた頃、有名なポール・ベールの通りから少し外れたところに、アトリエといふ酒場があつた。私がハノイで知合つた一友人は、その女主人がヴァレリーの詩の美しさについて話したとか、非常に氣紛れな女で、氣に入らない客が來ると明かに不快の表情をして、時によると不愛想に斷ること

があるとか語つて、一夜私を誘つた。かなり廣いがらんとした酒場で、ただ四五人の贅肉に太つたフランス人だけが、一方の席に陣取つて聲高に話してゐた。何れも五十歳前後であらうか。店は壁面やそれからテーブルの上をも、かなりエロチックな未來派風の繪畫で裝飾し、數匹の猫があちらこちらを靜かに歩き廻り、そして鏡を嵌込んだアーケード型の洋酒棚のつぺんに退屈さうにしてゐる一匹の猿がゐた。奇獸を愛することを廢類の象徴としてボードレエルが讚美したのを、私は思出した。二人の使用人である安南人が、おどおどした様子で、調理室で洗つた皿やコップをスタンドのところへ持つて來たり、主人の言ふことを聞いたりしてゐた。女主人は四十歳に近いと考へられるのであつたが、聰明な趣味の派手な服装をしてゐるバリ風の小柄な美人であつた。友人が私を彼女に紹介し、私たちは握手した。私たちは甘くてあまりうまくないコクテールを飲んだ。女主人はたしかに氣紛れな様子であつた。客のフランス人



は何れもあまり品のよくない様子であり、常連らしく、女主人の態度はひどくぞんざいであつた。その氣紛れな態度に私の友は素人的な非營利性を考へて喜び、私はその内心の圖々しさを憎んだ。人のよい私の友は、祖國が大敗してゐる時に遠い佛印に心もとない流浪をしてゐるフランスに同情して、「ここへ來てビールが無いと言つて怒つた日本人があるといふことですよ。ここらあたりが追ひ詰められたフランス人に残されてゐる最後の避難所でせうから、あまり私たちが出入りするのには控へてやるべきかも知れませぬね」と言つた。私は友のそれほどにも大きい善意に驚いて、「いやあ、あの女主人は相當のもんですよ」と言つた。しかしさうは言つても私は容貌に自信がある一應女らしく聰明なバリー女がこの佛印などへ來てゐれば、あれくらゐの我儘は當然なのかも知れないと思つたりした。來てゐる客は何れもその皮膚がきたならしく疲勞にたるんだ典型的な植民地フランス人である。女主人が女王のやうに振舞つてその悶々の

情を慰めてゐるといふやうなことも、肯かれないではなかつた。

話は後日物語に入る。私と同じ宿舎にゐたO氏はバリに十幾年も留學した人で、フランス語が非常に達者である。若い時にはフィリップを愛してその作品を翻譯したり小説を書いたりしてゐて、多少は世に知られた人で、現在はハノイのある商社に勤めてゐるのであるが、その性質としての人の善さのために到る處で親まれて、日本人、フランス人、安南人の別なく交際が廣い。酒の至つて好きなO氏はもちろん酒場アトリエを知つてゐた。O氏はある日、女主人に呼ばれたのもう一人の人を誘つて行き、いろ／＼の酒を飲んだが、女主人は今日はお招きしたのであるからと言つて、どうしても金を受取らない。そして一つの助力を希望した。それは上海から洋酒を輸入するのであるが、上海の方の許可は得てあるから、佛印の輸入監視所の日本官憲の許可が得られるやうに話してくれないかといふのであつた。O氏は非常に迷惑に思つたが、一應どう



いふことになつてゐるか尋ねてあげようと約束した。何に限らずさういふ出来事を、食事の時などにいつも私に話してくれるO氏が、「どうもアトリエのママに頼まりましたが、話はなかなか面倒なやうです」と語つたのは、それから四五日後のことであつた。日数が立つてもうそんなことを忘れてしまつてゐた或日、私たちが佛印の風習に従つて晝寢をしてゐたとき、電話のベルがけたたましく鳴つて、アトリエの女主人がO氏に即刻来てくれといふのであつた。O氏は行つた。その晩のO氏の報告は「やああの店にはあまり近よらない方が賢明ですよ。けふは二階の部屋に招じ入れられましたが、様子がどうも迂散臭いので、十分ばかり話してゐて、歸る時にここには阿片の吸飲室があるだらうときめつけたら、圖星をさされて、でも悪びれず、ええありますよと言つて、部屋を見せましたよ。東洋の各地を股にかけた密輸入團の根城になつてゐるんだと思ひますよ」といふのであつた。

私は十月の初旬にサイゴンからハノイへ汽車で移つたのであつた。午後七時頃發の一日一列車である。千七百餘キロ、四百三十里の行程で、四十時間を要する。途中まだ近年まで猛獸が出るために夜間は列車の運轉をしなかつたといふ森林地帯も通過すれば、また廣々とした平野をよぎることもあるのであるが、その平坦部では水田があつて、田植をしたばかりのところもあれば、稻の實つたところもあり、既に刈取つたところもあつた。一面の洪水に浸されてゐるところもあつた。その土地の住民に言はせれば、かやうに水田が遅速まぢまちなものにも、それ相當の理由があるのであらうけれども、私どものやうな通り一べんの旅行者には、雨季とか乾燥期とかいふこともあらうに、それがひどく氣紛れなことには思はれるのであつた。また水田より幾分土地を高めたところに數多くの高低を作り、その高い部分に圓形や楕圓形を掘りつけたその地方の住民の墓地があつた。この圓形や楕圓形はそれぞれの程度に人體を模したの之首



肯されるのであつた。世にも簡単な墓場であつた。私はまた汽車の窓から椰子の葉蔭の住民の堀立小屋を眺めて、そしてこの安南人たちが、その水田の作物と同じやうに氣紛れに、豊年には鼓腹し凶年には飢餓に死んで行くといふ植物のやうな生活をし、夜はその暗い堀立小屋の中で、彼等の中の傳承であるさまざまの悪鬼や妖靈に怯えつつ、かやうにして永遠の人生を人生する、生れ成長し死んで行くことを空想してゐた。——しかし列車がハノイに近づき、いはゆるソンコイのデルタに入ると、その邊はとにかくいはゆる「美田」であつて、そこに始めてその土地の上に、近代文化の所産たる「知識階級」が出現し、「人間の悩み」が溜息をついてゐるやうであると私は思つたりした。

私は或日ハノイの驛で、プラットホームで汽車を待つてゐる安南の上層の人らしい男が、腕に「生財有近財常足」といふ文句を入墨してゐるのを見たことや、カムボヂャ人は西洋風の現實的な實證主義教育には關心を持たず、依然

として土地の傳統に従つて子供は寺院に入り僧侶から悟りの道を學ぶ教育を受けることを好んだといふことなどを、それを東洋的であると考へ非常に興味あることに思つて、他のところでもう少し詳しく書いたことがある。ちやうどさういふことを知つたのが、ハノイで日本から持つて行つた日本畫の展覽會が開かれ、その機會に日本文化のよき理解者たるコンラッド・メイリの日本美術論がハノイの新聞に連載され、彼が日本美術の眞諦は佛教の理念に發してゐるものであつて、それは日本の民衆の胸奥になほ強く生きてゐるのであるといふ意味のことを述べてゐたのを讀んで間もない時のことであつたから、一層私がそれ等のことに深い興味を感じたもののやうである。

さういふ佛印の民衆の狀態の上に打建てられたハノイといふ首都は、商都サイゴンとともに、殆んど理想的な都市計畫が完成した近代都市である。整然とした街路に繁茂する街路樹の壯觀は、私たちを感嘆させるものがある。いはゆる



るプチ・ラック（小湖）の西洋風の造園術は明るく美しく、白いヨットの浮ぶ  
グラン・ラック（大湖）の夕映は健康で明朗である。その表情の豊かなソン  
イ（紅河）に架せられた東洋一の長橋ズームル橋は、もう舊式の橋になつたと  
いはれるけれども、しかしその宏壯な規模はなほ偉觀たるを失はない。私は或  
日に北部佛印の海水浴場として有名なドオンに、そしてまたサムソンに遊ん  
だが、喘ぎながら人力車を挽き、或は代赭色のぼろを着て、その邊りの田畑で  
働くみすぼらしい住民に較べて、その舗装道路の立派なのに驚いた。それ等は  
無遠慮な強力な意志の象徴であるかのやうである。これ等が少くとも今迄の植  
民地經營の文化的性格であつたのであらうと私は思つた。すなはちこれは他日  
その土地の在來民がそれ等の施設を享樂するやうになるだらうといふ想定の下  
に建設されたものではなく、在來民の文化を無視して別個に走る西洋文化の直  
線であるといふ氣がしたのである。

## タイゲン紀行

去年の十月初旬の或日の午後、私たちはハノイから車を飛ばせて、ハノイの  
北々西七十五軒のタイゲン（太原）へ行つた。その日は朝から日本内地でも珍  
しいほど、冴え冴えと晴れた日であつた。

ハノイの市街を出るところにかかつてゐるのが、有名な長橋のズームル橋で  
ある。かつての佛印の名總督ズームルが架設したもので、川の中の島の部落を  
跨いでゐる宏壯な橋である。その下を流れる紅河の水は、民族幾千年の興亡の  
歴史を秘めて、或日には快活に、或日には憂鬱らしく、悠々と流れてゐる。

橋を渡ると間もなく、有名なジャラムの軍用飛行場であつた。通行人は稀れ



であり、道路は坦々としてゐるので、亞熱帯ながら秋の色のただよつてゐる窓外の風景に私たちが眼をとめる暇もなく、自動車は快い速力で走り過ぎて行く。やがていつの間にか、緩かな高低が波打つてゐる丘陵性の平原が展開するやうになつて、見渡す限り一平面をなしてゐるいはゆる紅河デルタの地帯を出て、路が次第に山地に近づきつつあることが感じられた。左側に奈良の嫩草山に似た草山があつて、放浪の悲客阿部仲麿がそれを見て遠く故里を偲んだのであると、ここを過ぎる日本人の間に好んで語りつがれてゐる。仲麿が任官してゐたといふ越南都護府は、現在のハノイ市街の少し西方にあつたと傳へられてゐる。どの程度まで確かな史實であるかは、誰も今は明かにすることが出来ないのではないかと思ふ。

タイゲンは人口二三千くらゐと考へられる地方の裏さびしい一小都邑である。この町からさらに東北に四軒ばかり行つたところに、わが國の一國策會社

が經營してゐる鐵の鑛山があるのであつた。形式上は日佛の共同事業といふことになつてゐたが、實質上は日本の殆んど獨立經營なのではないかと私は思ふ。

その日はタイゲンに一泊して、翌日私ども一行の三名は、人力車を雇つてその鑛山へ行つた。日が照ると太陽が灼けつくやうに暑かつた。その路を今にも毀れさうな古びた人力車に乗せられて、ゆたゆたと揺られて行くのであつた。タイゲンは悪性のマラリアの本場であるといふことであつたから、私は内心びくびくものであつた。この鑛山に働いてゐる數百人の安南苦力の七・八割は漫性のマラリアを持つてゐて、脾臓が衰弱してゐるために、勞働力が非常に弱いといふことであつた。事實鑛山に着いて、高さ二・三米の段丘を作つて、野天掘りで作業をしてゐる勞働者を見ると、氣短かな私たちには齒痒く思はれるほど、まどろつこしい仕事振りである。その代り彼等の給金も支那苦力の凡そ三



分の一であるといふことであつた。きよとんとした平和な眼つきで、彼等は私  
 たちを眺める。子供のやうに彼等はからだも小さく、そして殆んど半数が女で  
 あつた。作業時間は午前が五時半から十時、午後は一時半から五時までであつ  
 て、晝の休憩時間が長いのは、晝寝の時間が必要なからである。

鑛脈が噴出した時の冷却の工合に依るのであるとのことであつたが、鐵鑛が  
 普通の土砂の中に混合してゐる。専門家でない私にはこの鑛山が有望なのかど  
 うかは解らなかつた。しかし北部佛印が埋藏してゐる鑛産資源は「知られざる  
 寶庫」であると言はれてゐる。今日の日本では非常に貴重な鐵がかくも簡単に  
 採掘されて、そしてその鑛石の純分の半ば以上、すなはち六十%とか六十五%  
 とかが鐵分であるといふことが、何か私には呆氣ない氣がするのであつた。鑛  
 石を手にとって見ると、石とは言へない、まさしく金屬であつた。

採鑛場を見てから、私たちはそこから輕便鐵道で約一キロ半のところにある



リ掘天露の山鐵ンゲイタ



分の一であるといふことであつた。きよとんとした平和な眼つきで、彼等は私  
 たちを眺める。子供のやうに彼等はからだも小さく、そして殆んど半数が女で  
 あつた。作業時間は午前が五時半から十時、午後は一時半から五時までであつ  
 て、晝の休憩時間が長いのは、晝寝の時間が必要なからである。

鑛脈が噴出した時の冷却の工合に依るのであるとのことであつたが、鐵鑛が  
 普通の土砂の中に混合してゐる。専門家でない私にはこの鑛山が有望なのかど  
 うかは解らなかつた。しかし北部佛印が埋藏してゐる鑛産資源は「知られざる  
 寶庫」であると言はれてゐる。今日の日本では非常に貴重な鐵がかくも簡単に  
 採掘されて、そしてその鑛石の純分の半ば以上、すなはち六十%とか六十五%  
 とかが鐵分であるといふことが、何か私には呆氣ない氣がするのであつた。鑛  
 石を手にとって見ると、石とは言へない、まさしく金屬であつた。

採鑛場を見てから、私たちらはそこから輕便鐵道で約一キロ半のところにある



リ 掘 天 露 の 山 鐵 ソ ゲ イ タ



船着場へ行つた。箱のない車に腰をかけて、レールの上を三人の安南人に押させて行つた。左側につづく丘陵を覆つてゐる森の濃緑色の巨樹の簇葉むらばがざらざらと太陽に輝いてゐて、それに私は大自然の奸悪な眼差まなざしを感じるのであつた。日本の内地では、洋服屋の飾窓などに、いかにも貴重品のやうに、鉢植えにされていつくしまれてゐるインドゴムの木が、ここでは荒野の王者のやうに、高く枝を張つて青空を領してゐた。この邊りの山野には虎もゐるといふことであつた。船着場には百噸積みの安南ジャンクが二艘着いてゐて、それに堀出されて河岸に積まれてゐる鑛石を男女の安南人が積み込んでゐるのであつた。籠に入れ、頭の上に載せて運び、板の橋を渡つて船の中へ落とし込むといふやり方であつた。これは運河の一端であつて、ここからハイフォンの港までこれ等のジャンクが往復するのに、凡そ一箇月要するといふことである。

鑛山の見物を終つて、再び人力車に乗つて、私たちはタイゲンの宿舎に歸つ



た。この宿舎には鑛山の監督に當る三人の日本人社員の人がある、何くれと私  
たちを世話してくれた。ボーイは最近までフランス政府の組織してゐる軍隊に  
わたといふ安南青年であつたが、齒を黒く染めてゐるのが私たちには女性的な  
印象を興へた。

その當時もうハノイなどでは食料品店には無くなつてゐて、高級な料理店に  
行かなければなかつたフランスの本場の葡萄酒が、この町では小さな店の店頭  
にあつた。晩の食事後、快く微酔してゐた私は、私の癖でみなの人に失禮して  
獨り散歩に出て行つたが、街は暗く、歩くところもなかつた。致し方なく、晝  
間私たちが葡萄酒を買つた店をのぞいて見て、私は思ひつくままに少しばかり  
の食料品や日本製のタオルや米國製の安全剃刀の替刃などを買つた。タオルは  
純綿で二本續きが「ピアストル(ピアストルはわが)」であつた。私は私の顔の毛が  
特別に硬いせいか、最近の日本製の模造品の切れ味のわるい替刃には、いつも

いらいらさせられるのである。日本刀の切れ味が世界に並ぶものが無いこと  
は、よく承知してゐるが、それであるのにどうしてこのやうに役に立たない商  
品を作るのであらうかと、私は思ふのである。切れない刀は一番贅澤で、これ  
以上の贅澤はない筈である。

私はハノイの商店などで日用品を買はうとする時に、その店に日本製の商品  
があると、私どもの購買慾が急に衰へるのに氣がついて、自分と自分から苦笑  
することがあつた。これは商人道徳の問題であるよりも、以前の日本映畫が、  
高級な観客はみな外國映畫を見るので、たとへ日本の映畫會社が良心的な藝術  
映畫を作つたところで、結局観客に喜ばれることが出來ず、相も變らず大衆向  
の安易な下等な映畫を作るやうに運命づけられてゐたやうに、今迄の世界の市  
場における高級品は、歐米の商社によつて殆んど獨占されてゐたので、わが國  
はどうしても安價な商品を多量に製作して、比較的文化程度の低い顧客を目標



にしなければならなかつたことに、より多く原因するであらうと思はれる。或日私がハノイで印度人の經營してゐる商店にちよつと面白い模様のネクタイがあつたので、その値段をたづねたところ、例の植木鉢を逆にしたやうな帽子を冠つてゐた色の黒い店員が、片言の日本語で「ソレ、ニホンセイ、ワルイ」と言つた。値段が馬鹿に安く一ピアストルであつた。私は辱しめられたやうな氣がしたが、意地を張つてそれを買つた。共榮圏の諸民族に日本を敬愛させ信賴させるためには、安價な粗悪品ばかり作るといふやうな印象を與へることは、今後考へる必要があるやうに私は思ふ。

さて話はもとに戻つて、私はこのタイゲンの雜貨店の三十歳前後と思はれる若い主人といろいろと世間話をした。ちやうど外國語の小説を讀むときに、解るといふことが一つの魅力であるのと同じやうに、二人の間に話を通じるといふことが魅力であつた。學校へ行つたかと聞くと、彼は安南人は貧乏だから學

校へは行かない、フランス語は子供のときから聞き嚙りに覺えたのであると言ふのであつた。決活に話す俐口さうな男で、服装なども普通に街で見かける安南人に較べてずつとさつぱりとしてゐた。私が結婚してゐるかたづねると、まだ獨身だと答へた。安南人としては非常に晩婚の方である。あなたは結婚してゐるかと聞くから、私は何氣なく冗談に、日本では結婚してゐるが、佛印では獨身であると答へると、彼は「それはからだによくない。私が美しい安南の娘さんを世話するから」と、眞顔で、乗り出すやうにして言つた。私はいやな氣がした。この不愉快さの原因は何であつただらうか。

私は必ずしも私たちの貞節を誇らうとするのではない。日本にも、自慢にはならないけれども、さういふ設備はある。しかしそれは設備である。個々の實行者から言へば、この道德に叛く場合には、必ず多少の精神の機縁があるのであつて、それなくして語られることを私たちは不快とするのではなからうか。



安南の傳説の中にも、死を以つて貞操を守つた女の話がある。だとすればこの「生理的思想」は、西洋人が教へたものであらうか。

私は輕はづみの冗談を後悔して、その店を出た。しかしそのまま寝るのにはまだ少し早い時間であつたので、私たちの宿舎の前で、劍劇のやうに、騒々しく笛や太鼓や鐘を鳴らしてゐた安南芝居を、私は試みにのぞいて見ようと思つた。表に廻ると「太原同聲劇場」と書かれてゐた。淺草あたりの見世物小屋の感じである。一等から六等までで、入場料は十五錢から一圓までであつた。日本人の優越感と威嚴のために、私が一圓拂ふと、切符を賣つてゐた洋服を着てゐる青年紳士が賣場から飛出して來て、私を丁重に平場の一番前のベンチへ案内して行つた。私がパリで行はれてゐたやうに、その男に十錢のチップを渡さうとしたら、意外さうにして斷つたが、最後に受取つた。

幕間であつた。正面の幕の上部の中央の部分に、例の通りペタン元帥の寫眞

が掲げられ、その左右にはフランス語と安南語とで書かれた元帥の「フランス國民よ！……」といふ勞働力再編成を要望する國民への言葉が掲げられてゐた。今度のヨーロッパ戦争の直前のパリを識つてゐるものには、六日の菖蒲十日の菊、「喧嘩過ぎての棒ちぎり」の感が深いけれども、しかしせめてそれでもしなければならぬところに、哀切な人生もあるといふものだと、私は思つた。一等と二等との席の上に、一米おきくらゐに縦に垂れ下つた布があつて、それに附いてゐる紐を左右交互に引張つて座席に涼風を送る装置が、地方色を滲み出させてゐて面白かつた。私の右側の席にゐた安南服の五十歳くらゐと思はれる男が、私に煙草を奨めて話しかけ、そこにゐるのが子役たちですよ、などと教へた。すぐ後ろの席に、割合に清潔な服装をした男女の子供が五六人ゐた。教へられなかつたら、私は比較的上流の家庭の、或は地方の小さき王族の、子供たちだとばかり思つたであらう。私の左側の席には品のよい善良さう



なフランスの青年將校がゐた。このフランス人とも私の右側の安南人が私を中に挟んで話をするので、いつの間にかこのフランス將校と私とも自然に口を利くやうになつた。彼は私に遠慮勝ちに、ドイツとソ聯とのどちらが勝つと思ふかとたずねた。私は彼等の大きな關心が獨ソ戰の勝敗にあることを思つた。「さあ、むづかしい問題だ」と私は答へておいた。彼は救はれたやうに、むづかしい問題だと鸚鵡返しに言ふ。彼は感情の上からドイツの敗戦を希望してゐるので、ソ聯の敗戦は殆んど明かであるけれども、なほ希望的觀測に未練を持つてゐるのであつた。

幕があく。背景の様子など、日本の田舎廻りの芝居と變らない。娘と年増女と色男役との三人の俳優が、舞臺に出てしやべつてゐる。私には安南語は一語も解らない。しかし見てゐると、その青年が家門の高い出で、そして女好きであつて、この娘を戀して、いろいろの手段と術策とを以つて物にしようとする

筋書であることが、大體了解された。二人の女はこの青年を嫌つて、いつも拒絶しつづける。遂に男が自分の手下の者を使い、娘たちを偽つて睡眠劑を飲ませる場面となる。危険は迫つた。するとそこへ、突然、劍を操ることの巧みな勇敢な青年が現れて、この急の場合を救ふ。その勇氣を誇示するかのやうに、青年は舞臺で烈しく劍を振り廻はし、そしてその技術を觀客に見せるのであつた。年増女が娘の母親であるか、或はこの娘を監督する立場にある特殊な女であるか、遂に私には解らなかつたが、觀客はその色男が失敗するたびに、げらげら笑ふのであつた。フランス將校が私に小聲で、「安南語は解らないが、とても奇妙ですね」と囁いた。私も「奇妙です」と答へた。

このやうな場面が重ねられて行く。暗轉して、また最初の三人の俳優が舞臺に現れて、言葉の應酬を始める。私は三人の眼を見て、その光が何れも異常であるのに氣がついた。精神の空虚な、鋭く烈しいけれども、しかし聰明さを表



はさない光であつて、眼尻が釣上つてゐるこのやうな眼を、私はアンリ・ルッソーの畫で見たことがあるやうに思ふのであつた。ヒステリックな高熱患者の眼であり、或は猫族の眼であると思つた。私は薄暗い客席から、舞臺の退屈な演技を見てゐる。私に彼等の心理が必ずしも通はないわけではなかつた。しかし私とこれ等の俳優との間にある人間としての距離、傳統や風土や環境などに依る距離、私は神秘的なその大いさを思つた。

結末が大活劇になるのではないか、などと思つたけれども、私は切上げて外へ出た。鐘や太鼓や笛の喚きたてるやうな騒音が、なほ容易に止まなかつた。私はマリアの蚊を警戒しながら、蚊帳に入つて寢に就いた。

## ハノイの日

十月から十二月までの三箇月間は、北部佛印において、一年中で最も氣候のよい時であると言はれてゐるのであるが、去年は十月の下旬になつてもよく雨が降つた。私は「夜見の國のやうに雨が降る」と日記に書いてゐる。濡れた舗道をぺた／＼と走る車夫の跣足が冷たさうである。私のゐた社宅は普通の個人の住宅を借り受けたものであつたから、だいたいハノイではあのやうな家が住宅の代表的なものだと思ふのであるが、酷暑を凌ぐ目的で、建物の前、玄關の兩側に、潤い葉のよく茂るバダミエといふ大きな樹が植えられてゐて、太陽の前に大きく兩手を擴げてゐただけに、雨が降ると眞晝でも部屋部屋が薄暗く、



濕氣が多く、亞熱帶の十月下旬といふのに、肌寒かつた。それに蚊が多かつた。家の北側は赤い煉瓦塀を隔てて軍人墓地になつてゐた。例の大いさの等しい十字架がたくさん幾何學的に並んで立つてゐるのであるが、ヨーロッパで見た軍人墓地のやうに芝が植えてなく、薔薇などの花卉も勿論なく、裸の地面に十字架が立つてゐるのであつたから、別して雨の日など陰濕な感じであり、參詣者も滅多に無さうだつた。さきの歐洲大戰に出征した佛印軍の戦死者の墓地であつた。墓地と社宅との境の塀に沿つて大きな樹が並び、その枝に澤山の小鳥が群れて、雨が少し止めば、いつも賑かに囀る聲が聞えて來るのであつた。家のうしろに、やや片側に寄つて、低い別棟があつて、それが炊事場であり、婢僕の宿舎であつた。私は臺灣の高雄で臺灣本島人の舊家を見せて貰つたことがあるが、この様式はそれと同じであつて、すなはち支那の様式なのであらうと思ふ。主人側と召使たちとが別棟に住むわけである。私たちの社宅に

は、十二・三歳の少年と二十四・五歳の青年と三十歳ばかりと思はれる料理人とがゐた。それと會社の運轉手も同居してゐたやうである。それから庭でよく子供が遊んでゐたし、三十歳くらゐと思はれる婦人もゐたやうであるが、關係のない隣家でもあるかのやうに、私はそれが誰の家族であるか知らなかつた。年輩から考へて、運轉手か、それでなかつたら料理人の家族だつたらうと思ふ。庭に鶏もゐたし、犬も一匹ゐた。少年と青年とが部屋の掃除をしたり、私たちの床をとつたり、食事の時の給仕をしたり、洗濯をしたり、その他私たちの命令によつて風呂を沸したり、靴を磨いたりなど、日常の用向を果した。佛印では少年をベコンと呼び、かやうな青年をボーイと呼んでゐる。キャフェやレストランでもボーイと呼んでゐる。私がバリ仕込みで「ギャルソン」と呼んだら、「あんなのをギャルソンといふのは勿體ないですよ」と言つて教へてくれた人がある點から考へて、フランス人の氣持では、特にフランス



語を使はないで英語で「ボーイ」と呼ぶのは、それもひどく命令的な口調で呼ぶのは、ギャルソンの貶意的な意味であるらしいのである。フランス人が安南人を馬鹿にしてゐることと言つたら！ 若しあなたがフランス娘と戀をしてハノイかサイゴンで愉しい散歩をしてゐるとして、その娘が安南人と應對するのを見たら、あなたは百年の戀もさめる氣持で、きつと考へさせられるであらうと私は思ふ。日本人と安南人とが似てゐるといふ點に原因があるのであらうけれども、私は西洋人の執拗な横柄さに義憤のやうなものを感ずるのが常であつた。それに對する安南人の卑屈さも相當のものであつた。何時か、日本人がハノイ銀座と呼ぶとか言ふハノイ目抜き通り「ポール・ベール」街でのことであつた。そこに値段が相當に高いのであるが、とにかくうまい菓子を食はせるフランス人經營の店があつた。菓子に飢えてゐる日本からのお客さんとフランス人とで賑ひ、そして大勢のボーイの中に少し眇すかめのボーイがゐて、「お菓子！」

「アイスクリーム？」とか、「八十五錢」とか、「ありがたう」とか、片ことの日本語を喋つて日本人に親しみを示さうとしてゐた。私は「リュ・ド・ソワ」(絹の街)にある安南人經營のもう一軒の菓子屋へもよく行き、むしろそちらへ多く行つて店の若い主人とは顔馴染みの冗談を言ふほどになつてゐたが、私の鈍感な口には味は殆んど違はないのに、値段は殆んど半分であつた。しかし店全體の感じがフランス人經營の方が贅澤で上品であつたことは争はれない事實で、安南人經營の店の方では、入口の菓子賣場のところに立つて、よく安南人の兵隊が手で掴んで菓子を頬張つてゐたりした。その店で私が手洗所を尋ねて教へられるままに行つたら、裏口の狭い薄暗い路次のやうなところの突當りにドアがあつた。それを明けて三段ばかり昇るとまん中に直徑二寸くらゐの穴があつて、下を見ると古バケツが受けてあつた。そしてそこら一面に實にふんだんに石灰が撒いてあつたが、これが恐らく安南人の家における最も豪華な便所



だらうと私は思ふ。何しろハノイの市街にはただの一箇所の共同便所もなく、薄暗い街路では婦人が用を達してゐて、却つて歩いてゐるこちらがしばしば驚かさされる始末である。上等の店とは言つても、やはり安南人の店は安南人の店であることは、遺憾ながら止むを得ない。フランス人經營の店の方で私が或日放送局の高橋邦太郎君に出會ひ、世間話をしてゐたときに、「まづくはないですが、馬鹿に高いですね」といふやうな述懐を洩したら、邦太郎君は例の大入らしい軽い口調で、「やあ、菓子といふものは香の問題ですよ。味をつけるのは問題でないので、香料のよいのを使はなくては駄目なんです。そりやあ、あの安南人の店なんか問題でありませんよ」と言はれて、私は成ほどさうかと感心して、それからフランス人の店のファンになることにした。さてその店の前で女學生見當の年齢の三人の娘を連れだしたフランス人と日本婦人との夫婦が人力車から降りて、太つた五十歳くらゐの主人が車夫に金を拂つてゐるの

を見たのである。街路にはたくさんの人が歩いてゐた。人力車は三臺であつた。じつに横柄といふか何と言ふか、きたない者に物を呉れてやるやうに錢をつまんで渡してゐる主人の傲慢な顔に、私は心中むら／＼した。日本婦人は割合に興味のよい日本服を着た、顔もまづ美しく、品のよい立派な人であつたが、私の思ひなしか少し憂鬱な顔をして、靜かに夫が金を拂ひ終るのを待つてゐた。私はかやうな夫婦の日常生活を想像して、きつと婦人がかやうな結婚を後悔してゐるに違ひない、しかしもうどうにもならないのだ、それでなければならぬ、と思ひ定めるのであつた。

また或時、同じくこの菓子屋においての話である。安南人の女中が十二・三歳のフランス人の女の子を連れて、この店へ來た。女中はパン粉か何かの買物だけを命ぜられて來たものらしく、買物を終へて外へ出ようとした。すると子供が菓子をたべて行かうと言つて聞かない。女中は宥め賺して連れ出さうとす



る。子供は泣き叫び、顔一面に涙を流し、はては女中の胸や兩腕のあたりをべたべたと両手で叩くのである。そして困惑する女中を尻目に、どうしても聴かない。見るに見かねたテーブルの三人連れのフランス人の女客が、子供を呼んで抱き寄せ、飲みかけの自分のチョコレートを子供に飲ませて、いろいろと慰めた。子供は涙一杯の顔のままそれを飲む。そこで泣き止んだ子供を女中が連れ出さうとすると、子供は今度は菓子を入れた硝子の容器の一つに抱きつき、外側から舌で舐めて、意地にも放さうとしない。今度は店員の一人が苦笑ひして、紙に包んだ飴を細い竹に挿した、日本でもよくある菓子を一本與へた。――ああ、西洋人の持つ偉大なる執拗さよ！ 私はヴァレリイやジイドの、またロシア映畫で見た梟雄ラスプーチンの、善にもあれ悪にもあれ、あの強靱な執拗さに驚嘆するものである。この時の主人公は一少女ではあつたが、私はその動物意欲の強烈さに、いら／＼する憎悪と、叶はないと思ふ氣持と、踏みにじ

つてやりたい焦燥と、この時くらゐ西洋人を輕蔑したかつたことはない。他人のことながら、飛んで行つてひつばたきたい衝動を感じた。私は子供の傲慢を憎む性癖を持つてゐる。私はいまだにヴィシイ政府が「中立」を宣言し、その立場を屢々躍起になつて辯明するのを見て、滑稽でもあり愚劣でもあると思ひ、じれつたくもあり、今にしてはつきり態度をきめなければ、平和が來たときフランスは保護國くらゐに成り下つてしまふだらうのを、何を愚圖々々してゐるかと思ふのであるが、考へて見ればこれは彼等の消極的な執拗さであるのかも知れない。私はバリにゐたとき以來、幾たび「フランス人よ、滅びる時には潔く滅びるがよい。とにかく君たちの文化は永久に地上の花として残るだらうから」と、心に呟いたかも知れない。しかし滅び行く當人たちはさうも行かぬものらしい。問題を執拗にこね廻してゐて、その間に何かの血路を求めようとする行き方である。西洋人の中では比較的淡白なのがフランス人だと言はれてゐ



て、それでゐてなほさうである。

話は思はず外れたが、私のゐた社宅のことに戻つて、料理人に私たちは二・三日目ごとに食事の材料費として、主人側一人 日分一圓くらゐの割合で金を渡す。料理人が多少の誤間化しをするのは通常のこととされてゐて、澤山に金を渡しても別にそれだけ御馳走をするわけではないさうである。主人側は昔の文士小牧近江氏とその娘さんと私との三人で、二階に三つの部屋があつて、それを一つ宛占有してゐた。階下には應接間と食堂と、なほ一つの部屋とがあつて、その部屋には小牧さんを頼つて時々遊びに来る安南青年が泊つて行つた。小牧さんは私が關係した會社のハノイ支店總務部長といふいかめしい肩書を持つてゐたが、それは氏に似つかはしくなく、氏は弱氣の善人で、自ら「文士崩れ」を以つて任じてゐた。その娘さんは東京の女學校を卒業して間もなく、かゝらだが餘り丈夫でないのに亂暴に酒を飲むお父さんの監督に來た賢い快活な娘

さんであつて、フランス人の經營してゐる女學校に通つてゐた。明治・大正時代の文士には底無しに人のよい人とへんに高慢ないやな奴とがあつてかなり劃然と分れてゐるやうであるが、小牧さんは前者に屬してゐて、思想性の稀薄な、過剰な抒情性を自分から持て餘してゐる人であつた。實に珍しい人である。フランス語が達者で、安南人ともフランス人とも廣い交際があり、話題の豊富な人である。明治大正文化の追憶のために、私は幾度もその特異性を持つた氏の性格や行動を書きたいと思ふのであるが、人間としての氏を浮彫にするためには、氏の性格が缺陷として現れる場合も書かなければならないので、何時も思ひ止まるのである。

小牧さんと私とは朝人力車をつらねて八時に事務所へ行く。二人は机を並べてゐる。しかし私は毎日の新聞を讀むのが主な仕事で、あとは契約書の翻譯をするくらゐで、自分の勝手な本を讀み、要するに餘り忙しくない。しかし氏は



會社の樞機に參劃してゐて、非常に多忙である。十一時になると社宅へ歸つて、晝飯である。佛印でもフランスの葡萄酒が次第に姿を消して容易に入手出来なくなつたので、私たちは大抵は麥酒を飲んだが、小牧さんは識合ひの安南人の藏元から直接に融通を受けるのだと言つて、どこからか安南燒酎を一升罫に三・四本づつ時々買入れ、これはほんたうの米から作つた燒酎だと語つて、幸福さうでもあり、得意さうでもあつた。その一升罫に密柑の皮を小さく切つて入れておき、晝に晩に、食事の都度愛飲するのである。しかしこれは時々は父娘の間の小さき諍ひの原因となつた。晝飯をすますと三十分か一時間ぐらゐ晝寝をして、午後二時に再び事務所へ行く。午後五時になると多くは私一人、小牧さんに別段の用事がない時は二人連れで、街路樹の下を語りながらブチ・ラック（小湖）のほとりまで歩く。不思議なことに、去年の夏あたり、あれほど東京で米英と開戦するか否かが人々の關心の中心となり、殆んど毎日何らか

の話聞かせられ、しまひに私はいはゆる事情通の人に「そんな眼ひき袖引きして話す話にはあきましたよ」と憎まれ口をきいた程であつたが、わが國の南方發展の策戰基地である佛印に行つて見ると、却つてサイゴンでもハノイでも殆んど誰も戰爭の話などしなかつたのである。私はさきに言つたやうに、新聞を読むのが私の主な仕事であつたので、ハノイやハイフォンで發行される三・四種の新聞に毎日眼を通し、當時の日米交渉の經過を中心にして世界の各方面で發表される諸種の見解など、大體において洩すところなく識つてゐて、米英と開戦になるだらう、それより外に解決の方法が無いことは、そしてその進路を徐々に進行してゐることは解つてゐたけれども、しかし私どもは殆んど戰爭の話をしなかつた。私は或日小牧さんと街を歩きながら、その日は別して險惡な空氣が東京とワシントンとの間に擡頭した日であつたが、日常茶飯事を例の通り話して行く自分たち二人を、自分ながら不思議に思つたことがある。ただ



一度私がハイフォンへ行つて、その支社の應接室で、新しく日本から着いた三人の社員とその支社の人たちと一緒に話してゐたときであつた。去年の十月十八日であつた。近衛内閣が總辭職して東條内閣が成立するといふニュースを中心に語り合つてゐたとき、皆の意見が期せずして、「どうしたつてここまで来た以上は戦争にならなければ解決しませんよ」といふことに一致した。相も變らずアメリカが佛印や支那からの日本軍の撤退を要求してゐるのである。それから暫く話が跡切れたときに、私が「米英と戦争になれば、當分私たちは島流しみたいになりますね」と言つた。すると多年貨物船の事務長をしてゐたといふその支社の主任が、「さうですね。でもそれはせいぜい二月かそこいらですよ」と、事もなげに言つた。私は安心してその日自動車を飛ばし、ハイフォンから三十キロのドオンソンの海水浴場へ遊びに行つたのであつた。

そんな風で、開戦は不思議に私たちの話題としての興味をそそらなかつた。

場合によつては籠城するのもよからうと、私も私かに腹をきめてゐた。そんなことよりも、毎日「今晚どういふ風に酒を飲んだら楽しいだらう」と考へることが、一ばん頭を使ふ問題ですよ、と笑つて語つた若い會社員の人があつた。小牧さんと私は湖畔のタヴェルヌといふキャフェのテラスで、オーケストラを聴きながら、冷たい麥酒を飲む。賢さうな安南人の子供が「シンブン」(夕刊)や「クチベラ」(靴べら)などを賣りに来る。それから私たちは人力車に乗つて社宅に歸つて、安南焼酎を飲んで晩飯を喰ふのである。

しかし會社の重役である小牧さんは頻繁に公私の宴會に出る必要があつて、そんな時には氏は深夜の一時か二時か、時にはもつと遅く、たいていはひどく酔つて歸つて来る。歸つた時は寝てゐるボーイを呼び起してドアを明けさせねばならないので、その聲が深夜に響き渡つて、それで大抵私はそれと知るのである。私は何故かさういふ時に氏の生活の痛々しさを感じた。しかし寝入つて



しまつてゐて、知らないこともあつた。或朝私が食堂で小牧さんと顔を合はせると、氏はにこ／＼笑ひながら、「今日は手が痛くてしやうがありませんよ」と言ふ。どうしたのですかとたづねるのを待つて、「ゆうべ運轉手の奴をひつばたいてやつたのです。私はあの運轉手を信賴してゐたんですが、それを甘く見られて、腹が立ちました。酔つてもゐたものですから」と言ふ。自動車が故障してゐたのを、横着をきめて放つておいたために會社の用が達しなかつたといふのが、氏の立腹の原因である。背が低くそして痩せてゐる小牧さんが氏よりも背が高く若くて元氣な運轉手に鐵拳制裁を加へたといふことが不思議であるのに、殴つたら運轉手が小牧さんが考へてもゐなかつた夜具二枚とその他のものを、盗んでゐた罪を詫びながら、持出して來たとのことであつた。實直らしい、安南人としては紳士らしい運轉手であつたが、それでゐてなほさうであることは、私にとつて意外であるとともに、人間の性の悲しさを思はせられるも

のがあつた。話す小牧さんも少し考へ込むのであつた。

また或夜、午前三時頃であつた。非常に騒々しいので私が目を覺ますと、小牧さんが何かしきりに怒鳴つてゐるので、私は起き出して階下へ行つた。小牧さんが裝飾のためにいつも應接間の隅に置いてあつた古い鐵砲を持つて、いきり立つてゐる。私を見ると「今夜はきつと泥棒を捕へてお見せしますから、待つててごらんさい」と言ふ。その理由はかうである。その日の午後安南人の間に非常に人氣があるといふ一青年作家が小牧さんを訪ねて來て、安南語で書いた自著の小説三冊にはゆる「支那文字」で署名して小牧さんに献じ、佛印の獨立運動に關係があるといふ嫌疑で佛印當局に追及されてゐるので、御迷惑をかけては申譯けない次第だからといふので、小牧さんが引留めたにも拘らず、そこそこ歸つて行つたのである。日本人にかくまはれてゐる限りは大抵は逮捕を免れ得るとのことであつた。氏はその青年作家の潔い行爲に感激して



わた。私も小牧さんから紹介されてちよつと會つたが、瀟洒な紳士であつた。ところがこのやうな事件のあつた日には、警察に届け出られないといふ弱點につけ込んで、社宅のボーイが必ず外から泥棒を導き入れるのであるとのことであつた。その上ボーイはまた警察のスパイでもあるとのことであつた。小牧さんの知人の安南人が佛印政府の警察内にゐて、その青年官吏が好意的にその事實を小牧さんに内通してくれたといふのである。

私たちは部屋の隅々を調べ、そして庭へ出た。私も颯爽とした緊張感を覺えた。門の鐵扉は固く閉ざされてゐる。すると當のボーイが跣足で、片手に懐中電燈を提げ、片手に六尺ほどの長い棒を持つて、ちやうど親の敵討をするやうな恰好で、しかしおど／＼しながら庭の隅から出て来て、「誰もゐませんでした」とおろ／＼聲で報告するのであつた。私は妙に噴き出したくなつたが、眞面目な顔をしてゐた。じつさいに屋敷内に怪しい者がゐる様子はなかつた。夜は太

古のやうに静まり返つてゐる。小牧さんが泥棒が忍び込んでゐるといふ見當をつけたのは、これまで數回泥棒に見舞はれたことがあり、それはいつも警察に届けにくひやうな事件があつた日の晩であることと、この日深夜の三時までもボーイたちの部屋にあか／＼と電燈がついてゐたことと、犬がけたたましく吠えたこととのためであるとのことであつた。折角勇しい様子をしてゐたけれども、實際にゐないものをどうもしやうが無かつたので、一同は泥棒狩を中止して、小牧さんと私は武器を捨てて食堂へ行き、小牧さんは私を顧みて、「ああ、咽喉がかはきましたね」と言ひ、ボーイに麥酒を抜かせた。私はその晩安南燒酎に酔つて寢たのであるから、本來なら酔醒めの水が飲みたいのであつたが、佛印の水を生で飲むことは衛生上危険があり、ちやうど飲料用として市販の鑷入りの水が無くなつてゐたので、ボーイにお茶を沸させて飲んだ。お茶のことを安南語で「ニョクチャ」と言ふ。私は「綠茶」の轉訛音かと思つてゐた



が、「ニョク」といふのは水といふ意味で、したがつて風呂のことを「ニョクタム」といふのださうである。

この立廻りの真相は私には解らなかつた。ボーイは少し怠け者の傾向はあつたが、容貌も割合に上品で、善良さうな様子をしてゐて、私を訪ねて来た友人が、「いいボーイがゐますね」と言つて羨しがつたことさへあるほどであつて、そのやうな悪黨であるとは私にはどうしても思へなかつた。他民族を識ることは容易ではなかつた。そしてそれを教導するには、大きな愛情と忍耐とが必要である。ともかくそのやうにして、私のハノイの生活が過ぎて行つた。

ハノイに着いて二・三日は私はオテル・メトロポールにゐたが、それから前記の社宅に引越したのである。メトロポールでは着いて二日目の晩十一時頃、私ともう寝ようと思つて寢臺で新聞を讀んでゐたら、突然けたたましい呼鈴が

鳴つて、私はびつくりした。起きてドアを明けて見ると十四・五歳のボーイが揉手をする恰好で立つてゐた。何だと訊ねても、ボーイの言ふのがただ「マドムアゼル」といふ言葉だけを除いては、私にさつぱり解らなかつた。そのやうな時刻に私を訪ねて来る「お嬢さん」がある筈もないので、「もつと話のよく出来る誰かを呼んで来い」と言つて追返したら、今度は二十二・三歳の安南帽を冠つたボーイが来た。話は今晚とても美しい安南娘を紹介するが、どうか、といふのであつた。メトロポールはとにかくハノイ第一流のホテルである。私が驚いてその話を翌日友人に話したら、その友人の知人がやはりその襲撃を受けて、「僕は必要ないが、何番の部屋にゐる自分の友人が求めてゐるから、そちらへ連れて行つてくれ」と言つて悪戯をしたさうである。そこで安南娘が訪れて来た。ところで安南娘は女學生でも菅笠を冠つてゐるのが多い。小さくて華奢に出来てはゐるが、ともかく菅笠である。その菅笠を入口のドアの外において



部屋に入るので、誰の眼にもそのやうな娘が訪ねて来てゐるといふことがすぐ解るのださうだ、などと私の友人は馬鹿話をして笑つた。いつたい日本人がさういふ商賣の目標にされ易いのは、何故だらうか。それはとにかく、ハノイなどの風紀が亂れてゐることは、確かな事實だらうと思ふ。或は風紀に對する關心が少いと言ふべきであらう。それを憂へてゐる餘裕のある誰がゐようか？

ハノイやサイゴンなどではフランス人と原住民との混血兒が相當の數に達してゐて、政治上にも一つの問題を提示してゐると言はれてゐる。とにかく今までは純粹の原住民であるよりも混血兒である方が、支配者の血が混じてゐるだけ、社會的地位が遙かに高かつたのである。このやうなことがフランスの支配を利した點も多いだらうが、大きいフランス人と小さい佛印娘とが夫婦氣取でホテルの食堂などに入つて來るその様子を見せられるとき、何か私は醜惡な氣がして、その雙方に反感を持つのが常であつた。

よく佛印の娘は美しいとか、かはゆいとか言ふ人があるが、それにつけて思ふことは、女を愛するのに尊敬の心持が加はらなければならない人と、犬の好きな人が犬を愛するやうに女を愛する人とがあるのではないかといふことである。すなはち美といふものに高貴さを求める孤獨型の人と安易さを求める大衆型の人とである。この後者の系統の人にとつてのみ、安南娘は美しいだらうと思はれる。日本人に較べて、色が黒いわけではなく、容貌がよく整つた婦人は少くない。一たいにむしろ聰明さうな顔をしてゐる。ただ一般に少し小さいだけである。しかし私は安南の婦人はどうですかと聞かれると、「蛙のやうですよ。體溫の低い感じですね」と答へるのが常であつた。今まで壓迫されてゐた劣等民族の自意識を強要されてゐたその佛印原住民に、精神的な矜持を求めることは無理であり、彼女らに精神の熱氣が乏しいのは止むを得ない必然であつて、恐らく奴隸のやうに従順であらうかはりに、人間としての感應度は低い



である。——アジアの黎明はアジアの諸民族が美しくならうとしてゐることもある。

## ドオソンの旅

去年の十月十八日、私は正午頃の列車でハノイを立つてドオソンを訪れる二・三日の旅を思ひ立つた。降り続いた雨が止んで紺碧の空からぎら／＼と太陽が照る流石に佛印らしい暑い日であつた。

私はハノイ驛のプラットホームでガソリン・カーを待つてゐた。驛の建物から言つて、左の方に四等車に乗るらしい佛印原住民の群がうごめいて居り、右の方に日本人とフランス人との混合した數十人の旅客が、物憂さうに、時々假眠から目覚めようとして數歩緩かに歩き、そして停止し、次第に汗ばみ、稀れに誰かが囁き、そして立つてゐた。ホームの屋根を出たところでは、厳しい陽



光のためにレールが發焰體のやうに匂つてゐた。遠くの森の葉先がきら／＼と輝いてゐて、そのあたりには微風があるらしかった。

私がホームにしやがんでゐた腕に入墨をした安南人を發見したのは、さういふ背景においてであつた。暑熱は人を安心させ、人を怠惰にする。「生財有近財常足！」それはまことにその場に相應ふさわしい文字であつて、誰だつて感心せずにはゐられないと思ふ。釋迦は印度のやうな暑熱の地に生れたので、あのやうに怠惰の涅槃を識つたのである。釋迦が日本に生れたなら、或は武勳輝く征夷大將軍にでもなつたかも知れない。星を頂いて出で星を頂いて歸る農民の生活は、北方のものである。それは厳しく清らかに、厳しく鋭い、神のやうな生活である。しかし私たちが空想する釋迦の生活は、満ち足つた、物憂い、怠惰の生活であり、官能の痺れるやうな逸樂に隣つた生活である。私は大和精神をきびしい男性的行動精神だとすると、佛教精神はそれにまづはる女性的精神だ

といふ氣がする。この安南人のやうに、必ず「近財」があつて「常に足る」ことを大悟して、あくせきすることなく、大勢の日本人やフランス人の群とともになら、それには無關心にプラットホームの柱の根に靜かに腰をかけてゐれば、列車は入つて來る時に入つて來るのである。あせつたとて早く列車が來るわけではない。そこに南洋諸民族の悟道がありさうであつた。

列車は二時間でハイフォンに着く。ハイフォンの支社からドオンンまで自動車を出してくれる筈になつてゐたが、支社への路が分らなかつたので、私は車中隣りの席にゐた人と同道して、とりあえずその人の宿舎である「富士ホテル」へ行つて休憩することにした。それは型通り日本の流行歌のレコードがキイキイ聲をたてて喚いてゐる日本人専用のホテルであり、鳳凰木の並樹の茂つた街路に面してゐた。その筋向ひが兵隊さんの宿舎で、「むらのぶたい」と平假名で書いた大きな表札がかかつてゐた。私たちは食堂のやうな部屋で「冷し珈琲」や



サイダーなどの冷たいもので車中の渴を醫した。それから私は支社に電話をかけた。帳場では控への電話帳に日本人經營の商社などの電話番号が抜萃されてゐて、私の會社の支社のところには、659、シッサンサンカントノフと書いてあつた。とにかく番號をフランス語で言はなければならぬので、さうした女中さんの心覚えである。

車中の友と再會を約して別れ、表へ出て少し待つて迎への車に乗つた。佛印では、商人でも、官吏でも、兵隊さんでも、初對面から十年の知己のやうに楽しく打解けられるのが、私には不思議でもあり、嬉しくもあつた。日本内地におけるやうに、紹介されて、下眼づかひに相手の意圖を讀まうとするやうな、あの虚無に似た白々した空白がない。私はハノイで二度ばかり會つて、東京では是非會ひませうと約束した或る會社の技師を、或日その會社へ訪れたが、名刺を通じれば飛んで出て來るとばかり思つてゐたのに、應接室で空しく長く待た

されたので、そのまま歸つてしまつたことがある。それでも手が引けなくて甚だ失禮したといふ陳謝の手紙を期待してゐたが、それも無く、私は日本と佛印とで友情の使ひ分けをしなければならぬことを悟つた。その技師の約束が嘘であつたわけではなく、要するに東京は忙しいのであると私は思ふ。

支社ではその日臺灣から着き五時四十五分の汽車でハノイへ行く四人の新社員がゐて、支社の人と共に、私たちは暫く話をした。

やがて出發する四氏を私は戸外に立つて見送る。その時今に没しようとする熱帯の太陽が金色に情熱の色に燦然輝いてゐた。男兒の骨を埋めて悔のない處女地だといふ放膽な氣持が湧く。白色の瀟洒な支社の建物に楕圓形の實が集つてなつてゐるバイヤの樹がよく調和してゐた。

四氏を送つた自動車が歸つて來るのを待つて、その車でドオンへ送つて貰ふ。ハイフォンより三十キロ、車は夕闇の中を走る。人もあまり通らない。沼



キ田の中に築いた一本道である。自動車のヘッド・ライトの光を受けて、大きい螢のやうに光つてくるめき、前面のガラスにぶつかる羽蟲が印象的であつた。蟲が多いのであらう。午後六時半、約三十分でバゴドン・ホテルに着いた。ホテルは入口のところが広い庭になつてゐて、海邊に寄つてテーブルが並び、傍に食堂があつた。部屋はそこからボーイに案内されて暗い路を海岸傳ひに行つたところにあつて、後ろに山を負つて海に向つて並んでゐる獨立部屋である。私はその三號室、すなはち三番目の家に導かれた。旅に來て海岸に迫つた山の巖窟に一夜を過さうとしてゐるやうな心持である。家族向といつた設備であつて、部屋の調度は豪華ではない。ランチ・シャムブル別間と十疊くらゐの廣さの寢室と洗面所があつた。

庭のテーブルについて食事をする。この庭には數個の燈籠のやうなものが置いてあつて、野天のテーブルを覆つてゐる樹木の枝に赤や黄の小さい電燈がと

もされてゐるなど、ちよつと祭典の日の神社の境内のやうであつた。季節外れで、餘り客は多くなく、日本の人は私の外には誰もなかつた。全部フランス人で、ただフランスの中老の紳士が安南人の娘とともに悠々と食事をしてゐるのが二組ほどあり、安南人の娘で子供連れのフランス人家族の世話をしてゐるのも二・三人あつた。要するにフランス人のほかは、戀人として女中として數人の安南婦人がゐたに過ぎない。この自然を楽しみながら食事をするといふことは、パリ郊外の景勝地の到る處で見られる風俗であつたが、今はどうであろうか。ここは港都ハイフォンに近いのであるから、日歸りの客も多いのだらうと思はれた。

ワイン・リストに私がパリで愛用した葡萄酒シャブリがあつた。しかし値段はパリのまさに六・七倍で、六ピアストルであつた。過ぎし日のパリ生活の追憶に、それを命じて食事をする。ホテル代は三度の食事付きで一日十ピアスト



ルであつたから、一罇六ピアストルの葡萄酒は大そうな贅澤である。次第に快く微酔した私は、親の遺産を後生大事に守つてゐるフランス人には眞似の出来ない、宵越しの金は使はない日本人だと、何となくそれを現在の國際關係におけるフランスの態度に連關して思ひ、傲然とした氣持で、それぞれに仲間と話しながら食事をしてゐるフランス人を、心の中で憐んでゐた。氣温が高いせいだらうと思はれたが、酔のまはりにはやかつた。私は食事を終つて波打際に降りた。左手に半島が延び、その突端の丘にオテル・ド・ラ・ポアント（突端ホテル）があつて、燈火が輝いてゐる。波の音が錚々と鳴る。星明りである。

大きい星の影が月影のやうに海面に落ちて水を照してゐる。瀟洒なヨットが四五艘、翅を休めてゐる白鳥のやうに、暗い海に靜かに浮んでゐる。春宵の夢のやうななまめかしい空想が湧く。波打際の沙上から振返るホテルの庭園には白色の服を着た紳士淑女が靜かに動き、それはいとも世に幸多く生きる人々であ

るかやうであつた。それから岸に登つて、この半島を貫いてゐる一本路を、少し散歩して見る。路に沿つて二・三軒の民家があるきりで、ドオソンは孤島のやうに靜まり返つてゐた。路傍のくさむらに蟲が賑かに鳴いてゐる。ハノイの夜にも多い蟋蟀はもとより、轡蟲らしいもの、鈴蟲らしいものの聲も聞える。或人の話では、佛印の蟋蟀はその大いさが内地の蟬ほどもあるのださうである。しかしそんなに亂暴な聲で吼えたりするのではなく、やはり可憐であつた。

眠くなつて部屋に歸る。ボーイの過失であらう、寢臺には二つの枕が並べてあつた。巖窟の一夜に遠慮はいらない。私は猿又一つになつて白い蚊帳に入る。中學生時代の修學旅行で江の島の宿に泊つた時のことや、或は伊勢路を獨り旅して好んで波の音を聞いた時のことなどが、それが遙かな記憶であるかやうに、或はまだ昨日のことであつたかのやうに私の腦裡を去來する。山國に



育つた少年の私には、海は驚異であり、華かなロマンチックな夢であつたのだ。今でも私の郷里の少年たちは海を識らずに育ちつつあるのであらうか。私は日記を書かうとしてノート・ブックを蚊帳の中に持込んだか、何故か「この世が夢であり、夢がこの世でない」と、誰が言ひ得ようか。野蠻人は夢と現實の経験との區別が附かないと言はれてゐる。それが原始宗教の發生する所以である」と書いて、それで満足して眠つてしまつた。私は久し振りのシャブリの一體に酔ひ過ぎてゐたやうである。

ところで私は私自身の酔つてゐる時の思想に、本來は非常に興味を持つてゐる、と言ふよりむしろ、それを非常に大切にしてゐる者である。詩人ヴァレリイは音楽を聴くことにも、酒に酔ふことにも、われわれの「個性」が動搖するといふ事實を擧げて、われわれの「個性」への不信を表明してゐるが、私は酔ふことに、私の才能の大部分を負ふものであるやうにさへ思ふ。酔ふといふこ

とは、最小限に見て、私たちが物を觀察する場合の角度を變へることである。平生臆病な人が一時的に大膽な人の立場に立つて物を視ることである。失意の人が一時的に世に恵まれた人の境遇において思考することである。そして生活的な動脈硬化から軽々と立上つて見る瞬間である。その上酔つてゐる時の私たちの思惟の作用は非常に速度が大きく、そしてその範圍が非常に廣いのである。私は酔つて街を歩き廻つてゐる時など、しばしば街燈の下などに立止つて、鉛筆を舐め、その時の「天來の思想」を手帳に記録することにしてゐる。忘れ去ることが堪らなく惜しいから、それを要心するのである。それが満員電車の中であつたり、家にたどり着いた時であつたりする。家に歸つたときは出迎へる家族の者に一言も口をきかず、怒つてゐるやうに黙つて自分の書齋にはいつて、書きつける。そのやうな時私は私の思想を實に素晴らしいと思つてゐる。私が物を書く生活の喜を識るのは、その瞬間である。詩人ヴァレリイの



言ふ「知性の祝祭」とは、まさにこの瞬間である気がする。私自身が光り輝く天才のやうな気がする。詩人は乞食にして同時に帝王である。翌日私は太陽の光で前夜の酔中に書きつけたのを開いて見て、嚴重に検討する。馬鹿くしい愚にもつかないことが特殊の熱意を以つて書かれてゐて、獨り苦笑する場合も勿論ある。しかし時には素晴らしい思想の片鱗が、金鑛の露頭のやうに、亂雑な文字の中に光つてゐることがある。

「酔ひ」の程度が大切である。酔ひ過せば、私はその場で睡つてしまふ。足りなければ、私の昇天が完全ではない。また酔に至る場合の周囲の條件も言ふまでもなく大切であらうと思ふ。その條件は最善であつたけれども、バゴドン・ホテルにおける最初の晩には、私は少し酔ひ過したやうに思ふ。

暫く眠つた私はやがて目を覺した。まだ午後の九時であつた。西洋寢巻を着て、暗い戶外へ出て見た。涼しい夜風が快い。狭い庭を限つてコンクリートの

胸壁があつて、その下に路が通つてゐた。その前面にやや遠くまで巖の群が海中に突出してゐて、その突端に當つて碎ける波の音が録々と鳴るのであつた。その巖の群の上を巧みにしぶきをよけながら、二人の男がカンテラを下げて輕快に歩き廻つてゐる。その二人が私には何故か馬鹿に大きく、七・八尺はあるやうに見えて、無氣味であつた。暫く見てゐて、彼等が網のたもを持つてゐるらしいことが推定されたので、魚をあさつてゐるのであることは、ほほ明かであつたが、遂に彼等はその異常な大いさを縮小しなかつた。安南人は小さいのであるが、フランス人としても、法外に大き過ぎるやうに思はれた。背景の岩とか暗い海とかの何か對比の関係でさう見えるのだらうと私は考へたが、面倒臭くなつて、遂に幽霊の正體を見届けずに、部屋へ戻つた。

翌日は朝八時半頃起きる。軽い朝食をとつてから、私は散歩に出た。空が一



點の雲もなく晴れてゐて、眼が眩むほどきびしい陽光であつた。その強烈な自然に威壓されたやうに、私の精神が怠惰になり、感情が萎縮する。何を考へたとてそんなに興奮しなくなりさうであつた。路傍にあつた内地の梅檀に似た樹の實が、それは梅檀の實より小さく數が多かつたが、輝かしい陽光に映えて、花よりも一そう鮮かで美しかつた。花の少い季節ではあつたけれども、それでも眞紅の花、青紫色の花など、私どもの目を驚かせるものがあつた。半島の尖端が高く隆起してゐて、城塞のやうなものが築かれ、その上に鮮かな色彩の近代的建物が作られてゐた。それがオテル・ド・ラ・ポアント（突端ホテル）であつた。濃藍色の空を背景にして、フランスの三色旗が海風にはためいてゐた。私は汗を流しながら、緩かな坂路を登つて行く。登りつめると、少し廣場になつてゐて、眺望をほしいままにすることが出来る。木の葉のやうに海面に漂つてゐる漁船の數が多い。私は此處の海の景觀はとにかく相當のものである

と思つた。

廣場に隣つたホテルの庭の椅子にかけて、私は冷たいものを飲み、それに添へて出された南京豆を噛りながら、私は四方の風景を眺めた。ビーチ・パラルでテーブルを覆つて、陽光を遮るやうになつてゐた。客はまばらであつたが、私の位置からやや離れたテーブルで、太つた二人の釣鼻の西洋人がさつきからしきりにひそ／＼話をしてゐる。時々私の方を横目で見るその眼が快適でなかつた。私は滅び行く地盤の上になほ策謀を續けるユダヤ系のブローカーの類だらうと想像した。時々バスが下の坂路を登つて來て、家族連れのフランス人をホテルの前の廣場に降した。

ホテルの傍から急坂を下ると、濱邊に小さい建物があつて、それはフランス人だけの水泳俱樂部であり、會員外の者の入場お断りの札が立ててあつた。ホテルとこの水泳俱樂部との中間の丘の中腹に、薪小屋のやうなものがあつて、



そこに安南人の一家族が住んでゐるらしく、私の姿を認めてその傍らの雑草の中から乞食のやうな子供が出て來た。そして垢でよごれた小さい兩手を差出して、「シャリテ」（施し）を求めた。

晝食の時、テーブルの上を覆つてゐる内地の桑の樹風の葉の茂つた枝の多い巨樹を眺めながら、私はこの枝に蛇でもからませれば、アンリ・ルッソーの眞晝の夢が描かれると思つたりした。

この日午後、私はシャワーを浴びることを發見する。やはり「郷に入つては郷に従へ」であつて、熱帯に來ては浴室のシャワーを浴びることが、怠惰な弛緩した筋肉に刺戟を與へて、健康によささうであつた。

夕食後にはオテル・ド・ラ・ポアントの前の廣場から小山の肩のところを一周する散歩路を歩いた。私は一人の人にも遇はなかつた。星明りであつて、わが故國の春の朧月夜くらゐには充分に明るかつた。星が、あまりにも夥しい星

が、手を伸ばせば届くかのやうに近く、沈黙の瞳を注ぎ、私は靜かに歩いた。人間がどんなに考へたとても人間の理論を無視する偶然といふものが無いといふことはあり得ないといふ、宇宙に對する人間の卑小感が胸に湧くのであつた。

しかし私は昨夜の幽靈はやはりフランス人だつたらうと思つた。佛印に來るとフランス人がとても大きく感じられるのである。植民地人が本國人よりも比較的に大きいとふこともあり得やうけれども、安南人が非常に小さいから、その對比で大きく見えるのである。體量から言つたら、安南人は平均して二分之一には足りないであらう。日本人も佛印では大きく見えるのであつた。

翌十月二十日、私は夜のまだ明けきらない朝六時のオート・カーでドオンを出發して、ハイフォンに向つた。これは高級乗合自動車で、乗客は私を除けばみなフランス人であつて、ドオンに別宅を持つてゐる人たちによつて利用されることも多いのだらうと思はれた。私たちは原住民の乗つてゐる乗合自動



車を途中で追越した。

ハイフォンの支社で契約書の和譯を一通依頼されて、それを果し、佛人と安南人との混血兒の社員に案内されて、急いで市中の書店を見廻つたが、やうやく凡庸な書籍二冊を發見して買つただけであつた。それから事務所の三階で晝食を御馳走になつた。ここの米飯はほほ内地米に近く、私には美味で、その上消化もよいやうであつた。ハノイで友人などに御馳走になるやうな場合に、よく「ここの飯はうまいでせう」と言はれる。その時「しかしやはり匂ひますね」と答へると、その友人が怪訝さうな顔をするのが普通である。われわれには佛印の米飯は動物の汗のやうな特殊の臭氣を持つてゐるが、馴れてしまへば少しも感じられないもののやうである。

ハイフォン午後一時十五分發のガツリン・カーに乗つて、ハノイに向ふ。ハイフォンとハノイとで警察の管轄が違つてゐるらしく、僅かの間に二度のバス

ボートの検査が煩しくて、その上日本人だけが検査されるのが何としても愉快ではないので、検査員に「煩いですね」と少し不機嫌な顔をして見せた。



## 明治節の日に

午前八時二十分頃、ドアを叩くボーイに起される。今日は明治節である。食堂で朝の珈琲を飲み、部屋に歸つて少し机に向つてゐたが、いつも階下においてある自転車を持出して散歩に出た。小牧氏のお嬢さんの所有で、フレームが卵色に塗つてある婦人用である。素晴らしい好天気である。グラン・ラック（大湖）の中道なかみちを突切り、堤防を登つて右へ遠くまで行く。紅河も今日ばかりは機嫌を直し、明るく悠々と流れてゐる。風のままに行く安南ジャンクの群も涼しさうだ。すり違ふ誰にも「今日は！」と挨拶したい氣持であつた。河の景色に別れて市内に入る。街路樹に射す日影が、實に美しい。間もなく突然にプチ・



ラック（小湖）のところへ出たので、湖畔のタヴェルヌのテラスで休憩して、街路の風光を眺めながら、麥酒を一杯飲む。ちやうど久しい陰鬱な冬がすんで驚くほど明るい日が訪れ、マロニエの芽が一齊に花のやうに伸び出るパリの五月の風光に似てゐて、そしてもつと浮き／＼する氣持が、街路樹の光の躍つてゐる枝に、プチ・ラックの小波に、小屋掛けの花屋の娘の頬に感じられる。素晴らしい好天氣である。地上の自然がこれ以上快適であることが考へられないと思はれる陽光である。人力車に乗つて、フランス婦人が行く。色のまつ黒い印度人が行く。安南人が行く。四・五人の日本の兵隊さんが花屋の小屋の横に群れて、仲間の者に寫眞を撮らせてゐる。私は再び自轉車に乗つて、プチ・ラックを一周し、宿の前を行き過し、植物園方面へ行く。路が又もグラン・ラックの畔に出る。湖に接した沼地に、いろいろの浮草が茂つてゐる。風は涼しいが、幾年振りかで乗る自轉車であり、麥酒も廻つて汗ばましい。街はづれの路

をどこまでも行く。昔の越南都護府の舊趾であると言はれてゐる地域である。間もなく左に曲る路があり、そしてもう一度左に曲つて、今度は高い堤防のやうになつた路を登つて、宿の方へ引返す。ハノイへ六軒といふ里程標がある。道ばたにしゃがんでゐる安南商人にバナナを買ふ。傍にゐた青年が通譯してくれて、實が十六個ついてゐる見事な房が十錢であつた。宿に歸る。跳ね上るやうな氣持である。

すでに午後一時に近く、愛用の食前酒、安南燒酎の酔の廻つた小牧氏が、しばしば訪れて來る例の二人の安南青年に、食卓で向ひ合つて大聲でフランス語で話してゐる。小牧氏の會社に新しく赴任して來た大木君も訪れて來て、食卓を共にしてゐる。小牧氏は私に「いま二人の安南青年に私としては初めて訓戒を與へたところです」と説明した。そして訓戒を續けて、「今日は日本の明治節だ。新しい光は東方からだ。人を相手にせず、自分のためにせず、天を相手に



してやれ」と諭した。安南青年の潘君がやはりフランス語で、人生の原則的な心構へを言ふ。すると小牧氏は、急に言葉の調子を落して「二人とも健康に氣をつけてやつてくれ」としんみりと言ふ。情に脆い氏は涙ぐんでゐるやうだ。

夕方になつて自動車で郊外を小牧氏と共にドライブする。満月である。空に一點の雲もない。ハノイに着いた日、圓らずもブチ・ラッタに照る満月を見た。それからちやうど一箇月になつたわけである。

ホテル・メトロポールで、午後六時から總領事館が主催で在留日本人が明治節の祝杯を舉げることになつてゐたので、小牧氏に同道されて行く。シャンバニーが抜かれ、日本酒があり、アイスクリームやサンドウィッチがあつた。適當な時を見て一人で失禮して、飛んで來た運轉手に散歩して歸る旨を言ひおき、歩いてブチ・ラッタの畔に出て、月光に誘はれて池を一周する。この日二度目

の一周である。湖畔の大樹の蔭に、水際の芝生の上に、戀を囁いてゐる幾組かの安南人があつた。酒亭ルラッタで月を見ながら、麥酒を一杯命じた。少し離れたテーブルで三人の兵隊さんが通じない言葉でボーイと談笑してゐる。兵隊さんが歸るとボーイの一人が側へ來て、「日本の兵隊さんはとても愉快です」と嬉しさに話す。

街に出る。微酔の時の例の浪費癖が出て、大して必要もない雨外套と湯上りタオルとを買つた。學校を出るとすぐ小店員になつた田舎の少年が、その最初の藪入りの日に、生れて初めて自分の自由になるお金があるために、活動を見たり汗粉をたべたりして浪費する心理に似てゐると思ふ。これは他人にはもつと説明を要するけれども――。それから車に乗つた。車夫が何も言はないのに、心得顔にどん／＼走り出す。何處へ連れて行くつもりだらう。ハノイにこわいところは無い筈だ。連れて行くところまでとにかく行つて見ようと心にき



めて、黙つてゐた。良夜とはこの晩のことだ。月が牙え、街路樹の葉先が光り、派手ではない花の咲いてゐるらしい樹々から、薬のやうな強烈な香が薫つて来る。貴重な香木の白檀は南洋の樹木であるに違ひない。車はかなり郊外らしい街を走る。すると突然それが例のタカラヤのあるカムテンへ行くつもりらしいことが解つた。カムテンはハノイの有名な享樂街で、そこにあるタカラヤは日本人専用のカフェで、敗戦後フランス政府が禁止して以來、ハノイでダンスの出来る唯一の場所である。私も二三度友人に連れられて行つたことがある。鐵道の踏切のところへ出た。もう疑ふ餘地はない。自分はカムテンへは行きたくない、引返せと言つて、宿の町名を教へた。車を走らせてゐると風に觸れる手の甲が寒いくらゐ、夜の空氣が清冽である。良夜とは今宵。ベン・ハイ（右へ）、ベン・チャイ（左へ）と言つて見ると、車夫は黙々として従順にその方向へ曲る。これは自分が書物で習つた安南語だ。跣足の子供がこの時刻ま

で何を賣るのか、疲れて噎れた聲で、街から街へ呼び歩いてゐる。「パーサ」と物憂い哀調で呼ぶのは、南京豆賣である。子供が紐のついた古びた箱を頸にかけてゐるので、私は最初の頃は靴磨きの少年だと思つてゐた。

歸つて日誌をしろしてゐても、綠蔭で嗅いだ花の薬のやうな香がまだ鼻腔に残つてゐて香ふ。この花の香は夜になつて空氣がしつとりして來ると、重く街路に流れてただよふのである。



## サムソン紀行

雨模様の曇日である。私はサムソンへの旅を思ひ立つた。これはハノイの南方百八十七キロのタンホア（清化）までを汽車で行き、それからは自動車又は人力車によるのである。「タンホア」が正しいのであらうけれども、ハ行の發音をしないフランス人には「タンオア」となり、それを連音して「タンノア」と言つてゐる。このタンホアは佛印縦貫鐵道線上の一都市であるけれども、ハノイ・サイゴン間の列車は一日一往復で、ハノイ發は毎日午後六時であるから、それによる時は深夜にタンホアに着くわけである。それでどうしてもローカルに依る外はない。ただ土曜日と日曜日だけは準急行くらゐに相當するガソリ



ン・カーが出るとのことであつたが、私の乗つたのはどんな小さい驛にも停車する普通列車であつた。

午後一時ハノイ驛發、定員六名の二等車の車室は、私と下士の服装をしたフランス兵と日本流に言つて國民學校四年生くらゐのフランスの子供だけであつた。その兵士は上衣の上に革帶をしめて短劍を吊り、鐵砲を携行し、その上彈薬でも入つてゐさうな、一ダース入のビール箱ほどの大いさの二個の箱を、座席の傍へ持込んでゐた。彼をフランスの農村の出身に違ひないと私が想像した理由は、彼が屈託のない氣安さと人懐きさと人のよさとを持つてゐるからで、四・五日くらゐの無精髯が伸びてゐた。彼は「お早う」とか、「今晚は」とか、「ありがたう」とか、そして私たちには少し突飛に感じられるのであるが、「山羊」とかの數個の日本語を知つてゐて、私に問ひ訊し、そして楽しさうに傍の子供に教へるのであつた。私たち三人は間もなく一家のやうに親しんだ。やが

て兵士が「バリをどう思つたか」と言ふ。「素晴しかつた」と私が答へる。彼喜ぶ。彼は一步を進めて、「東京とどちらが美しい？」と迫る。私は「その美しさは別種のものだ」と言つた。兵士が解らなさうな顔をするので、さらに「どちらだつてそれぞれの長所がある」と説明すると、そこで兵隊が社交心に戻つて、今度は機嫌よく笑ふ。「あなたはカトリックか？」とたづねる。私がバリのノートル・ダムの近くの店で買った基督像を表してゐるメダルを懐中時計の鎖に付けてゐるのを見つけたからである。「いや違ふ」。「日本にカトリック教徒がありますか？」「あります。しかし新教徒の方が多いでせう」。「日本はこのトンキンと同じやうですか？」「違ひます」。「安南人はまだ未開です。これを教養することは非常に困難が伴ひます。しかし安南人は聰明で辛抱強いから、學校に入れると成績は優秀です。布教團がずゑん奥地まで行つてゐます」。「方々に教會の塔が見えますね」。「さうです。スペイン人のゐる教會があります。



フランス人の布教師もあればアメリカ人の牧師もゐます。しかし基督教徒にとつては祖國はありません。唯一の祖國は「ヴァチカンです」。この時すり違ひの汽車に若干のフランス兵が乗つて居り、後續する貨車に大砲を積んでゐた。「フランス兵が大砲を運んでゐる。どうするのだらう」と子供が言ふ。「英國人に備へるのだ」と兵隊が手短かに答へて、横目で私の顔を見る。子供が合點が行かなさうな顔をする。きたない顔をした兵隊であるが、歌を唱つて聞かせたり、謎々を言つたりして、子供をいとしくてたまらないといふやうに愛撫する。子供は學校で習つてゐる歴史の本や自分が書いた漫畫帖などを鞆から取出して、楽しさうに私たちに見せる。

窓外はしばしば見渡す限りの洪水であつた。廣漠な平原に水利施設が殆んどないのであるから、長雨が降れば水は自然に田を埋めて洪水となる。海原のやうな洪水が部落の樹だけを残して、曇り空の下に擴がつてゐる。それで部

落から部落へ原住民が小舟を操つて交通してゐる。破壊的ではない洪水である。しかしそれ故に漫性的になりさうな洪水である。けれどもいはゆる「體温の低い」原住民には、悲劇的な表情はなく、驛ごとに人が群れて列車をぼんやり立つて見てゐる。また驛ごとに四等車の昇降口には、火事場のやうな混雑が繰返されるのであつた。列車は少し走つては、またすぐ停車した。最初に兵士が降り、間もなく子供が降りた。するとこの二等室にも同一の箱を仕切つた隣りの一等室にも、乗客は私一人を除いて誰もゐなくなつた。私は漸く暮れて行かうとする窓外に、五月のやうな雨空の下に鈍色に連るはてしない洪水を眺めてゐた。とある小驛で一人の安南人が雞のやうな姿勢で路傍に蹲まつて、ぼんやり汽車を見てゐた。私は休憩してゐるのだとばかり思つてゐたが、不圖見るとその股間には糞があつて、排泄中なのであつた。私は彼が終つたとき、何ものかで拭ふかどうか疑つた。それが今日の安南人の生活レベルである。掘立小





安南の漁夫

屋に住む家族の人数がいやに多い。

この鐵道のレールが割合にして非常に細く、日本の東海道本線などの二分の一くらいであると教へられたことがある。その鐵路から二尺くらゐ下まで洪水が迫つてゐて、鐵路に沿つて走つてゐる舗装道路も、處によつて二、三寸水に浸つてゐた。何だか少し心細い乗心地であつた。方々に四つ手網が張つてある。二米平方くらゐの廣さの網であるが、常置的な設備で、網を引いて網を上げ、魚をとるやうになつてゐる。しかし一度網を上げたら、少くとも十分や二十分は上げることが出来ない筈である。それを安南人は横に倒した籠のやうな形の小さい小屋の中にしやがんで、じつと待つてゐるのである。非能率的であり、労働量が非常に小さいのが安南人の生活である。筋骨逞しいといふやうな形容詞は佛印の原住民には當分必要がない。

電燈の設備のない小驛が多い。汽車が着くたびに、蠟燭やカンテラで辛うじ





安南の漁夫

屋に住む家族の人数がいやに多い。

この鐵道のレールが割合にして非常に細く、日本の東海道本線などの二分の一くらいであると教へられたことがある。その鐵路から二尺くらゐ下まで洪水が迫つてゐて、鐵路に沿つて走つてゐる舗装道路も、處によつて二、三寸水に浸つてゐた。何だか少し心細い乗心地であつた。方々に四う手網が張つてある。二米平方くらゐの廣さの網であるが、常置的な設備で、網を引いて網を上げ、魚をとるやうになつてゐる。しかし一度網を上げたら、少くとも十分や二十分は上げることが出来ない筈である。それを安南人は横に倒した籠のやうな形の小さい小屋の中にしやがんで、じつと待つてゐるのである。非能率的であり、労働量が非常に小さいのが安南人の生活である。筋骨逞しいといふやうな形容詞は佛印の原住民には當分必要がない。

電燈の設備のない小驛が多い。汽車が着くたびに、蠟燭やカンテラで辛うじ



て用を達すのである。私は電燈の故障かと思つたが、さつきから汽車の廊下に立つてゐるインテリらしい安南人にたづねて見たら、「電燈がないのです。彼方に光が見えるのは工場です。この町には工場が三つあります。めい／＼の會社で電氣を設備するのです」と教へた。

午後七時タンホア着、細雨が降つて薄ら寒かつた。田舎の小都市、人口は七八千あらかうか。附近に鐵の産出がある。私は人力車に乗つてレエノオ・ホテルに投宿した。五號室、一泊の宿料は二ピアストル五十であつた。このホテルの女主人は佛人と日本人との混血兒であるといふことであつた。客は殆んどないらしく、私と食堂で食事を一緒にしたのは一組だけで、佛人と安南婦人とが結婚して三人の子供を持つた一家族のやうであつた。

食後私は時々降つて來る細雨に濡れながら街を少し散歩したが、その印象は暗かつた。